

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十一卷 第九号





日本保育学会監修

保育学講座 <全10巻>

A5判
上製本ケースつき

各巻1,200円

- | | |
|----------------------|--------------------------------|
| 1. 幼児教育の原理と方法 | 6. 子どものしつけと性格
—乳幼児期から中学期まで— |
| 2. 保育課程 | 7. 子どものおもちゃと遊びの指導 |
| 3. 日本の保育制度 | 8. 幼児の身体発育と保育 |
| 4. 現代の幼児教育—海外の動向と進歩— | 9. 日本の幼児の精神発達 |
| 5. 幼児の生活指導 | 10. 幼児の両親教育の研究 |

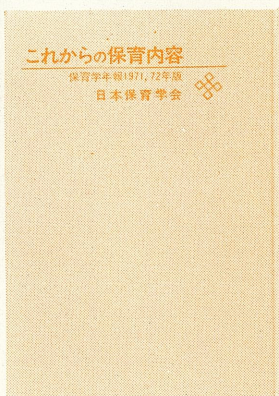
これからの保育内容

保育学年報1971, 72年版

日本保育学会編

A5判

価格 2,000円

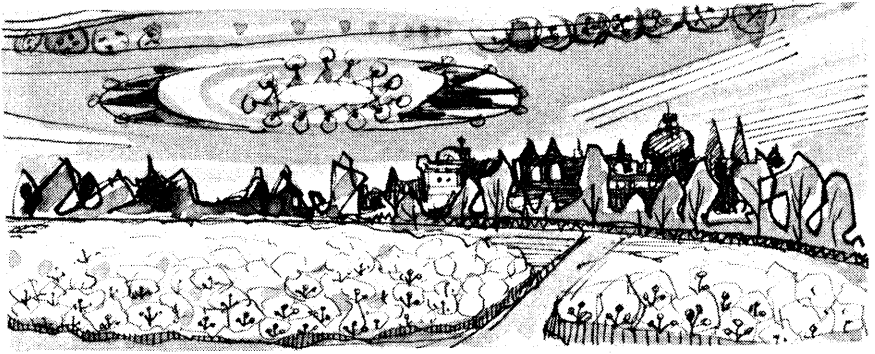


- 保育者には欠かせない問題、望ましい保育内容について気鋭の先生方が研究成果と豊かなビジョンを展開。
- 現場の方は実践の支えとし研究者は基礎的文献としてお手もとに一冊は必要な本。
- 明るくハンディな造本で従来より大幅に値下げしお求めやすくなっております。

幼児の教育

第七十一卷 第九号





幼児の教育目次

——第七十一卷 九月号——

表紙 園 房江
カッタ 斎藤信也

©日本幼稚園協会
1972

倉橋惣三選集より……………(4)

良識への問い

— 児童文学による「子ども」への接近! —……………(5)

本田 和子……………(5)

★講演

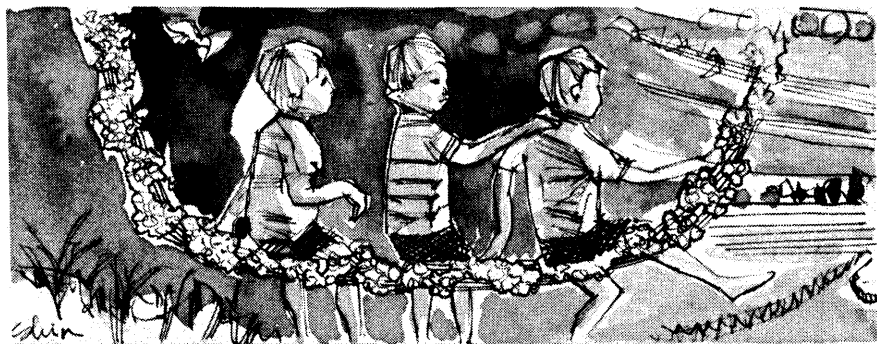
昔話のユング的解釈・その二

— 貧乏神の話 —……………(9)

河合 隼雄……………(9)

子どもの生きがい……………

西村 良子……………(25)



幼稚園にのぞむ

齊藤 幸彦 (29)

幼児の友だち関係の発達について

— 砂遊びを中心として —

石坂 昭子 (33)

ほか

「幼児教育の源流」について

莊司 雅子 (41)

「幼児教育の源流」I

ジョン・ロックの幼児教育論

山根 祥雄 (42)

交差保育法の実践・その五

宮沢キヨ子・大塚朝子

佐藤佳代子・相楽幸子

指導 大戸美也子 (57)

こんな本・あんな本

川崎 千東 (66)

洋書紹介

江波 諄子 (68)

夏やすみ後

夏やすみが残して行つてくれた雑草が園一ぱいに蔓延はびこっている。お山の上にも、砂場のまわりにも、花壇の後ろにも、人跡まれなる大原野の眺め茫茫と茂っている。おいしば、めいしば、あれちのぎく、おおぼこ、とぼしがら、のびえ、かたばみ、むらさきかたばみ、その間をこおろぎが飛ぶ、ばったが飛ぶ、ここ暫くは雑草主義遊園の理想の時。

中略

とにかく子供は大喜びである。半ズボンの膝を没する雑草の間を駆け回って、きゃっきゃつと言つてばったを追うている。みずひきの赤いのをしごいて来て、小さな紙きれに包んだり、あおぎりの実をむしって葉に盛ったり、おままごとの御馳走はいくらでもある。お庭でも、公園でも、幼稚園でも、草は見るもの、花は眺めるもの、その、見て眺めてじかして触るべからずときまつている草が、ここで

は遠慮なくふんだんにむしつてよいのである。当分は別に玩具も何もいらぬ。この雑草こそ、自由自在の玩具である。恩物である。

可愛そうな都会の子供たちは、この雑草を特別の賜物のように喜んでゐる。自分たちの生活に必然の世界としていながらも自然が与えてくれる野も知らず、山も知らず、そこで遊んだ先祖たちの幸福も知らず、たまたまの夏やすみを利用して、自然が辛うじて与えてくれたこの雑草に、渴けるものが水を得たように喜んでゐる。そして年に一度ずつのこの雑草に、真におもしろい遊園の楽しさを享けている。

年にたった一度でも、この雑草のある幼稚園は幸いな幼稚園である。一日でも多くこの雑草を刈らずに置いて下さる先生は感謝すべき先生である。

(倉橋惣三選集 第二巻 幼稚園雑草より)

「良識」への問い

— 児童文学による「子ども」への接近 —

本田 和子

子どもたちが「ままごと」をしている。テーブルの上にお皿を並べ、カップを並べた。お客さまがすわる。

「どうぞ」「コーヒードす」

「お客さまはカップをつまみ上げ、すぐテーブルの上にもどす。はずみにカップがひっくり返った。それを見て、主婦役の子どもが立ちあがる。玩具のポットに水を満たすために、水道に近よる。その時、保育者のおだやかな声がかかった。

「お水は、お外で使いましょうね」

主婦役の子どもは黙って保育者を見上げ、からのポットを見つめ、瞬時、立ちすくんでいる。やがて、からのポットを持ったまま、ままごとコーナーに戻っていった。

子どもたちが、金網の扉によじのぼる。目をキラキラさせて、笑を立てながら、嬉々としている。

「ワイー」一番上までのぼった子どもが、向こう側に首

を出して叫ぶ。扉のてっぺんから見おろされるあき地は、いつも金網ごしにのぞく空間とはちがった新しい世界である。

保育者がかけよってきた。

「おかしいわ。おさるさんみたい。さあさあ、おさるさんたち、ジャングルのおうちへ帰りますよ」

子どもたちはちよっとバツ悪げに、金網をおりた。

子どもたちが思いついた「一番ステキなこと」は、こう

して、保育者の良識によっておだやかに変更させられる。

子どもたちは、表面きってさからうことはしないままに、何となく遊び方を変えるけれど、「おもしろさが半減したこと」を感じている。

水を使わない「ままごと」は、単調な食器いじりに終始するし、ジャングルへ移行したおさるさんの群れは、いつの間にか一人もいなくなっている。

保育者の「良識」とは一体、何なのだろうか。

子どもたちを安全に、大過なく過ごせるために、最低限必要なこと、という答えが用意されているかもしれない。

そして、子どもだって生活の秩序を学んでいかねばならない、という「けじめ論」が、その後に続くかもしれない。そして、これは、おとなの側から考えれば一応もつとも無理なのである。

しかし、子どもにとって、おとなのたてとするこれら「良識」は、一体、どのような意味をもち、どのように位置づくのだろうか。

子どもたちは、おとなと共通の言葉でそれを告発し、問い直すことをしないけれども、子どもたちなりの表現で、おとなの「良識」を絶えず問い続けているように思われる。

子どもの世界に内接する児童文学者たちは、それらの告発を、作品中の主人公をして大胆に行なわせていることが多い。ここでは、二、三の作品を手がかりとしながら、子どもの側からなされる、おとなが「良識」と信じて疑わなもののへの問いかけに、耳を傾けてみよう。

◆ リンドグレーンの作品から

リンドグレーンの描く子どもの像は、子どもの世界の英雄である。ピッピを代表として、カツレくん、ミオなど、子どもたちの憧れの対象が少なくない。

この主人公たちは、完全に子どもの論理に生きているが、その代表は、何といつても「世界一強い女の子、長靴下のピッピ」であろう。ピッピは、一匹の子ざると馬を家族として一人つきりで「ごたごた荘」に住んでいる。学校へも行かないし、夜になればまくらに足をのせ、頭にふとんをかけて眠る。台所の床一面に小麦粉をのばしてジンジャー・クッキーを五〇〇個も焼いたりする。

小さな女の子が保護者もなしに一人で好き勝手に暮らすことはよくないと、町のおとなたちは、ピッピを養護施設「子どもの家」に入れようとする。ピッピは、迎えにきたおまわりさんを、軽く一蹴するのである。

「わたしは子どもで、これは、わたしの家だわ。だから、ここは『子どもの家』よ。わたしはここにいるんだし、それでたくさんよ」

学校に関しても、ピッピは明解である。

「わたしは、竹たけさんさんの靴くつ（かけ算の九九のこと）なんてものをしらなくたって、九年間、ちゃんとやってきたわ。だから、これからだってやっていけるとおもうわ」

おまわりさんは、何とか説得しようとして言う。このまま大きくなり、「ポルトガルの首都はどこか」と問われて、それを知らないとは恥ずかしいじゃないか、というのである。ピッピはあつさり答える。

「こういつてやるわ。」ポルトガルの首都がどこなのか、そんなに気になるんなら、じかにポルトガルに手紙をだし、きいてみなさいよ」と。

子どもにはおとなの保護が必要であり、教育は不可欠であるという思いこみ方、これは、考えてみれば大変な思いあがりなのではないか。子どもは、子どもとして「りっぱにやっつけていける」ものなのである。

白馬の王子ミオは、現実の世界では薄幸な孤児であった。魔神に導かれて「はるかな国」に運ばれ、おとうさんの王さまにめぐり合って、王子ミオとよばれるようになったのである。

ミオはある日、バラ園で庭番の子どもと一緒にパンケーキをおながはちきれるほど食べ、大笑いしている。そこへ王さまが通りかかる。ミオは、ハッとして不安になる。こんなことをして王さまにしかられないだろうか。しかし、王様は幸せそうに一緒に笑い、自分の喜びは、息子が大笑いしているのを聞くことだと言う。

ミオは、今こそ、本当の幸福が、自分の上に訪れていることに気づく。それは、自分たちの「一番ステキなこと」が、決して「してはならないこと」にならない国に、自分はいるのである。

ピッピの物語は、そのあまりの奔放さと型やぶりの主人公のゆえに、最初は、あちこちの出版社で出版をことわられたという。おとなのいわゆる「良識」は、それに対する大胆不敵な挑戦者を、こころよしとはしなかったのである。しかし、この本が出版されるやいなや、ピッピはスウェーデン中の子どもを夢中にさせ、子どもたちの秘められた願いの実現者として、世界中に支持者を得たのである。

◆山中恒の作品から

山中作品には、既成の秩序に挑戦し、常識的モラルを否定して、自己の世界の確立に全エネルギーを傾注するような子どもが、主人公として登場する。

「とべたら本こ」のカズオは、学校教育を信用せず、両親の愛情にも疑問を投げかけて、「家出」という形で「良識」への反逆を表明する。現実の重要性を口では説きながらも、カズオがただ年齢が小さいというそれだけの理由で、カズオの述べる真実を認めず、おとなの言に左右される教

師の姿が、教育不信の象徴として猫かれるのである。

「ぼくがぼくであること」の秀一は、「あなたのため」

と称して、彼の成績に一喜一憂し、友人との文通にまで目を光らせる母親に、宣戦を布告している。家庭の平和とか親子の愛とかいう言葉のかけにかくされた偽瞞に、我慢ができないのである。

山中作品の子どもたちは、美しいものと当然視されている母性愛や教育者像に、問いを投げかけ、おとなたちの掲げる平和の理念にすら挑戦する。

たとえば、カズオの家に「世界博愛平和教団」の支部長が寄附をもらいにくる場面がある。両親のこぼんだ寄附をカズオは追いかけて行って、百円札一枚という形で意志表示をするにもかかわらず、それが、居酒屋の一杯のコップ酒になっている事実を提示するのである。平和の大切さは、学校でくり返しくり返し教えられていた。そこで、カズオも及ばずながら実行しようとしたのに、これからは「平和だつて気をつけよう」と思わざるを得ない。

子どもたちは、おとなの社会通念に片はしから疑問を投げかけ、善行・美德とされていることすら、往々にして、虚偽と瞞着に満ち満ちていることを、痛烈に指摘しているのである。

◆おとなの「良識」は時として暴力となる

二人の作家の作り出した子ども像を手がかりに、子どもの論理からは問い直され、挑戦さるべきものとして、おとなの「良識」をとらえ直してみた。

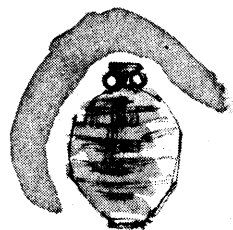
ピッピやカズオは、極端な破壊主義者であったり、極端にこちようされた存在ではない。子どもの側から、おとなが「良識」と信じて疑われないことを問い直せば、このような形に表現することができるといっわけである。このくらいの激しさで挑戦しなければ、問いかけ不能なほど、おとなの「良識」とは堅固なものだということになるうか。

おとなと子ども、保育者と幼児の間に形成される「教育」とよばれる人間関係は、時として、おぞましい「力関係」として成立しかねない。「おとなは子どもを指導する責任があり、その成長に責任を負っている」ということは、安易に使われるなら、幼児が自らの生に対して責任を持つべき自律的人間であることを、否定するほどの危険性をはらんでいるのではないか。本質的にはになうべくもない幼児自身の生き方の責任を、おとななるがゆえに負わねばならないとする思いあがり、**「善意の暴力」**ではないかいなか、自らに問い続けることを怠ってはならないであろう。

◇講演◇

昔話のユング的解釈・その二

貧乏神の話



かまど―聖なる場所

昨日は怠け者の話をしてましたが、昨日言っておりました貧乏神の話（岩波文庫のおとぎ話の第三巻）をちょっと解釈してみます。あるところに若い夫婦者が住んでいました。妻はしょうたれ、無精者で、お茶を飲んだらお茶がらを、ごはんを食べたら食べ残しを、くどの前へ捨てていました。そこでしまいは貧乏神がつけこんで、その家にはびこっていました。というのはですけど、まず、夫と妻、これが最初の登場人物です。ところで、この妻が無精者で何でもくどの前に捨ててしまう。くどはかまどのごとくそこは非常に大切なところです。火をたく

河合 隼雄

ところなのでですね。家の中心はどこかということとは非常に大切な問題ですけども、やはりひとつの大事なこととして、火をたく場所だという意味で、かまどが考えられます。

その火についてはあとでいいますが、人類にとって非常に大切なものです。火を自由に扱えるのは動物の中で人間だけです。だから火を扱うようになったとか、火をもたらすとか火を獲得するということは、結局人間が動物と同じということではなく、人間として、ある意味では自然に反するものとして、文化をもつものとして出現してくる、話のはじまりなわけです。だから人類はいかにして火を獲得したかということがギリシャ神話で有名な、プロメテウスの話にあります。あるいは、火が

なかったところへ、鳥が火をくわえてやってきたという話がシベリアの方にあります。鳥というのはまっ黒ですけれど太陽と大いに関係があるのです。ともかく火をもたらすことは非常に大事なことです。そうすると家の中で常に火のある所というのは、聖なる場所ということになります。

今はもうわれわれの生活で、普通の場所と違って聖なる領域などというのはほとんどない。そういう所、皆さんの家で神棚とか仏壇ありますか。ある家でもそんなところはクモの巣がだいたいぶかかっている所だと思えます。(笑い)たとえば神棚があっても、毎日とか毎月一日には燈明をあげて拜んでなどという家は非常に少ないと思えます。あるいは、われわれが神社やお寺を訪ねて行っても、それが聖なる場所であるということを忘れている場合が多いですね。お寺へ行くのが好きな人がいますが、これはお寺詣りにいくのではなく、お寺見物に行く人が多い。観音さんとか、奈良の大仏とかいって行く時でも、美術的な興味の方が多いのじゃないかと思えます。

そんなわけで、聖なる場所というのをわれわれはほとんど忘れかかっています。しかし昔の人たちにとって聖なる場所というのは確実にありましたし、私の母親の子どものころはもっていたと思います。たとえば、正月には、注連しずなかざりをおくどさんにまつって、そこへ燈明をともして拜むのです。何をかがむ

かというのと、へっつい、かまどを拜むわけです。かまどにはかまどの神さまがおられる。かまどのあたりをよこしたら、そんなことするとかまどの神さんにおこられるとか、かまどの上に腰をかけるとうなることかわからないというぐらい、恐ろしかったのです。そういう非常に聖なるかまどの神がいる所へ、ものを投げていたというのですから、これはよほどの無精者ということになります。よほどの神を恐れぬ無精者です。無精者もその辺までいくとまたおもしろいことがでてきて、今度はかまどの神ではなくて、神さんは神さんでも貧乏神というやつが家へ果食うてくるのです。

人間の中の男性性・女性性

ここで少し解釈を試みます。話の主人公はこの男ですが、奥さんが無精者で、そのために貧乏神が宿ったという、これを心理的に考えると、はじめに言ったと思えますけれど、この話全体を一人の男の物語、一人の男の心の中の物語と考えてみるとどうでしょうか。男性というものは女性的な考え方とか、ものの見方とか女性的な感じ方にとりつかれると怠けることが多いです。皆さんは男性でないからわかりにくいと思えますけれど前回の話をもう一回いいますと、王さまと男三人がいたでしょう。それでこのお話には女性原理が欠けているから女性原理を

もたらずような王さまでないといふ。一番怠け者をえらぶというのは、それが一番女性に近づきやすい男です。

(笑) 女性原理を持つ男です。ぼっちりやって、ぱりぱりっと、仕事をやる、これは男性の役割だとぼくは思っています。そうですね、ぱっぱとやって早く課長になり部長になり社長になり、そして家来をあごで使って仕事をする。これは男性的な仕事だと思えます。それに対して女性的な生き方というのは、ぱりぱりもりもりやるのではなく、ぱりぱりもりもりやる人の入れ物になるというか、前に「無為にして化す」という話をしましたが、なにもしていないようで、誰か行動していく人の入れ物になっているという生き方と違っていいと思えます。ここで間違えないようにしてほしいことは、われわれは一応、男性的、女性的と名前をつけていますが本来はどうかのかわかりません。なんとなくそう思っているわけです。

女の人でも男性的な生き方が得意な人、男の人でも女性的な生き方が得意な人もいます。けれども総じてぼくが今男性的という方が男は得意で、女性は女性的な生き方が得意です。そして、その時代によってどちらかの生き方がなくよい生き方であるとか、おもしろい生き方だと、時代の精神として皆が思っていることがあります。たとえば現代だったら男性的な生き方の方に魅力を感じる人の方が多いと思います。そうじゃないです

か。私がこういう話をするだけで腹の立つ人があるかもしれない。せん。(笑い) 私は女性だけどちらを選んだ。それがどうして、男性的なのかと腹の立つ人はすでにそう思っているわけですし、そういう時代が来ますと、女性だってできるじゃないか。どうして女子大へ行って何が悪かろうといふ皆やって来たわけです。

いわゆる学問というのは男性的なものです。ところが学問に感情を入れなければならぬというのは女性的な面も入れこもうということになります。だからユングの心理学は女性性ということを、ものすごくとりあげたヨーロッパでは非常にめずらしい心理学といっているんです。フロイトの心理学は男性の目から見た心理学ですけども、ユングの考え方の中には女性的な見方が入っているわけです。ところで、男性というのはなるべくそういう因子をなくしてがんばろうとすると、たとえば、私という人間は男としてもかく一応の成功をしようと思つたら、一番よい方法というのは女性と縁を切ることです。だから女性なんていうのには目もくれずひたすら勉強し、そして結婚なんていうばかげたことをせずに、そうですね、うっかり結婚して、本を読んでいたら奥さんがやってきて、あんた何してりますの。(笑い) 今度日曜日遊びにいきますかと言われる。そんなのに目もくれず、ひたすら学問をして偉くなっていく人もあります。ところがそういう人は非常に一面的です。そんな

人が学者の中におられると思います。そうして幸か不幸か一生
そうして生きて死んでいく人もいます。そしてまたおもしろい
ことに、こういう人で結婚している人もいますが、その人は奥
さんを人生の伴侶としてではなく、仕事をやりぬくの都合の
いい小間使いとして結婚しているのです。ところが人間対人間
としてこの女性と話し合いをはじめようと思つたら、学問は大
分駄目になるかもわかりません。ところで、こんな人はユング
に言わせると、あまりにも人生の半面しか生きていない。すべ
ての男性はその心の中に無限の女性的な生き方なり感じ方なり
を持っているというのが彼の考え方です。また、皆さんが女性
として生きていこうとした場合でも、男性性というのが心の中
にあるわけです。しかし、心の中の女性にうっかり取りつかれ
ると大変なことになる。たとえば、私が心理学の勉強をし
てネズミはどこを走つてどういつて誰が三番で四番であつたか
というような研究をする。これを学会に発表して一番や二番や
と思つているうちはいいが、そのうち、「こんなネズミのことや
つて何の意味があるのしょう」(笑い)てなふうになんか心の中
の女性がいい出すのです。こいつの言葉を聞き出したらなんにもで
きなくなりす。ぼんやりと考えこんだり、今までしてきたこ
とがすべて馬鹿らしく見えたり、何も手がつかなくなりす。

退行— regression

そういう状態になつた時、これを心理学的にいつて *regres-*
sion といひます。退行といふのでご存知でしょうが、結局自我の
方にあつたエネルギーが、無意識の方へ流れてしまつて、自我
をコントロールできるエネルギーが少なくなるから何もできな
くなるのです。皆さんだつてこの退行を体験するでしょう。似
たことをやつていふと思ひますが、女性の場合には非常に複雑で
す。とにかく男性の心理を語るのはいやしいのですが、女性
の心理を語るのは非常にむずかしいことです。さつき言いまし
たようにユング派の人たちといふのは、ユング自身もそうです
が、女性の心理をもつてよく考えた人ですけれど、ユングの本
を読んでどうしてもやつぱり男性の方を書いた方がよくでて
きます。つまり男性の心の中にある女性像、つまりユングがア
ニマとよんでいるものについて書いてゐるのはよくできてゐる。
しかし、女の人の心の中にあるアニムスのことになると、ペー
ジ数が少なくなつてきます。たとえばぼくの「ユング心理学入
門」でも女性の心の中のアニムスについてのべてあるのが少な
くなり、女性の読者から残念だと言われたことがあります。こ
れは、ぼくはアニマは非常によく知つていますし付きあつてい

る。ところがアニムスさんの方はなんとも。すると、女の人が本を書いて、アニムスのことを書かないかと皆思うでしょ。ところが非常に不思議なことにユング派の女の人の書いた本をみても少ない。これは本を書くという仕事にのり出すこと自体、これは男性的な仕事だからと思います。だからどうしても本を書く時は、漠然とわけのわからないことは絶対かけなくて、筋が通って論理的に書こうとする場合、これを書くのはものすごくむずかしいです。女として皆さんは自分の心の中に男性が住んでいることをよく知っていると思いますし、だからこそお茶の水へ来たかと思えます。ところでユングははっきり言っていますが、今までたくさん女性の性に出会ったが、いまだにアニムスのことを明確に話のできる女性に出会ったことがない。それほどアニムスというのは捕えにくいものだを書いてありますが、皆の中で誰かがんばってアニムスについて物語を書いてください。ばくは読んでみたいと思います。

女性もアニムスにとりつかれると退行をおこします。同じ退行でも男性の場合とは内容が違ってきます。どんなのかというと、アニムスにとりつかれると、私も大学へ行って研究をしてがんばって博士になってあるいは代議士になってとか、男性的な仕事をバリバリやるのを空想して、そして結局は何もしない。先日、九州大学の村山さんの発表された学校恐怖症の事例で、

中学一年の女の子が「諸君とアリ」という童話をつくったことを話しました。あの話の中でおもしろいのは諸君という語が何べんも出てくる。「諸君とアリ」という題でわざわざあの子は諸君という語を強調している。そして、諸君という語を言いたくてもしょうがない。皆さんは中学のころぐらいに、一度皆の前で「諸君」とやってみたいなど思ったことありませんか。女の子ってなかなかそれができないんですね。ここにこととして「皆さん」と言う。その時、そんなのをやめて「諸君われわれは」といいたい。それはなぜかという、明日の「眠りの森の美女」の話の中でもいいいますけれど、思春期に大体皆この心の中の男性を感じているはずですよ。その時に児童会の会長になってがんばった人もこの中に大分いるだろうと思えます。そして、女の子なんかけとばしてがんばった人たちは第一回目のアニムスのアタックを受けたのです。この学校恐怖症の女の子はアニムスのアタックを受けて「諸君」とやりたいのにできなくて、ものすごい退行をおこしている。そしてその退行の中で諸君という童話ができるのです。諸君という童話を書きながら、学校へも行けないというのはよくわかりますね。

ところで、話をもとにもどしてこの物語の主人公はだんだんと貧乏になっていくのですが、それはなぜかと言うと、アニマ像のためにエネルギーがものすごくとられて、意識内のエネルギー

一が少なくなっている。そんなふう心理的に考えます。それが話のはじまりです。そして次第に貧乏になって、しまいははどうにもこうにもしょうがなくなつて、正月が近づいても餅もつけぬということになりました。

ここで正月というのは新しい年を迎えるということですが、今は違いますがぼくの子どものころは正月になると皆年をとったのです。日本人である限りはみんな一斉に年をとったわけですから極端にいいますと十二月三十一日に生まれた人は生まれながら二日目になつたのです。正月といつたらわれわれ東洋人、日本人にとっては西洋人よりもはるかに大切な日です。つまり新しい時がある。退行のきまるところ、どこかで反転現象がおこるのです。反転現象がおこるときは年が改まるのです。ある人にとつての正月、つまりその人が今日限りもつとがらばろうとする日なら、そういう意味で正月になるのです。だから、そういう人の正月と考えてもいいし、あるいはその人の誕生日というのが非常に大きい意味を持つ場合もあります。何かやっぱりここに一つの区切りがある。人間というのはやっぱり区切りというものを持たないためです。このような意味で大晦日の晩に誰かがやってくるというテーマの童話が日本にたくさんあります。「大年の客」というテーマです。(関敬吾著「日

本昔話集成」に大年の客の話がたくさんついています。)

火を燃やす— progression

退行もきまるところまで来たところと、座板でも燃やそうと、座板を白いのは、親父はまきもないので座板でも燃やそうと、座板をはがしてぐどにくべてあたっていたということです。何にもしない人間がとうとう火を燃やし出したわけです。主人が無精な奥さんとはかくとして、心の中に火を燃やそうとしたのです。火というのは先ほどもいいましたように非常に大切な意味をもってきます。「火の精神分析」という本があります。バシユールという人が書いたもので、興味のある人は読んでみてください。その本にプロメテウスの話も書いてありますが、われわれ人間全体にとって火というのは非常に大事なものです。

さて火は心理的に何を意味していると思えますか。心に思い浮かべるものは、そうですね、エネルギーだとかパッションとか。長嶋はもえていた(笑い)という表現もありますね。それに、火の暖かさよりも火によって転ずること、一番初めやみだつたところに火をもちこむことによって、照らすことができる、というふうな、われわれの無意識の世界を意識化するというふうな意味も大きいわけです。それからどんなものがありますか。火の悪い面は何ですか。これは悪いことというたら

破壊しますね。つまり燃えつくして全く無に帰することができ
るのです。この前お月さんの話をしましたが、月というのは生
のシンボルであり死のシンボルだといいました。このようにシ
ンボルのむずかしさというのはいろいろな意味をもっているか
らです。火は無に帰するというような、あるいは破壊させると
いう意味があるのです。シンボルというといろんな意味がある
ので、単なる破壊じゃなく、無に帰してしまつて火で全部もや
してその中からでてくる、フェニックスのような、そこからも
う一ぺん生まれかわる鳥ですが、そのように生まれかわる――
浄化ということもあります。

同じ火でもいろいろな意味がありますけれど、この場合は
エネルギーという感じが強いですね。退行してアニマの方にも
のすごい力がかかっていたけれども、とうとう正月が来るので
エネルギーがやつと動き出したということです。

プロメテウスが獲得してきた火なんていうのは、むしろイプ
の食べたリングと同じようなもので、本当にものすごい強いの
です。わが国の例でいいますと、八百屋お七の話がありま
すけれど、これにはいろいろな意味が入っています。つまりあ
の時代において恋をするということが、どれだけ一人の女性に
とって意識的に人生を生きるということにつながったか。無意
識に生きている人は、親のいうままに見合結婚をしています。

その中で恋愛するということは一人の女として生きる、つまり
意識をもって、自我を持って生きるということです。八百屋お
七の放った火というものはあるいは意識、エネルギー、パッシ
ョン、破壊のすべての意味があつたかもしれないと思つて、そ
んなふうな小説とかおとぎ話を読むことは本当におもしろい
です。放火ということが大きい意味をもってぼくらの心に訴えて
きます。だから放火犯人に会つた時も、ぼくはこういふことを
考えているわけです。なぜこの人が火をつけたのか、悪い事を
するにしたつていろいろな方法がある中で、他ならぬ火をつけ
るといふことをこの人が選んだのは、一体火の中に何を見よう
としたかといふことをものすごく考えるのです。そう思うと放
火をした人の気持ちといふのはわかる場合もあります。

ところで今の場合にはエネルギーという意味が非常に強い。退
行しておつたエネルギーが今度は自我の方へ帰ってくる。これ
をユングは *proressions* (しょうがないので進行と訳します。
退行に対して) この人が床板をめくつて火を燃やしたというこ
とはむちゃくちゃでしょ。要するに燃やすものがないから、燃
やすものはそれしかない。ところがね実際経験するとわかりま
すが、最後のドタン場のむちゃくちゃといふとここまで行かない
と、人間というものは立ちあがれないのです。私は心理療法
をやっているわけですが、実際にやっていますと多く

の人が退行して落ちていきます。そして落ちつく先は死のうとさえ思います。貧乏神にとりつかれて元気がなくなつて、そして多くの人が死にたいと言います。そして中には「私がこの世にいたくなくなることがすべてを解決することだと思ひます」という人もいます。そんな時、ぼくらはなかなか死ぬのをとめませ

ん。つまり、早くとめてしまふと話が始まらない。よく死ななきゃ治らないと言ひますが、要するに死んでもらわなければ治らないのです。だから皆さんはそういう体験があるかどうかわかりませんが、本当に一人の人がずっと *regress* をおこしますと、こんなにつまらない人間なら私は死んだ方がいいとか、もう自殺しようと言ひれます。これを聞いて、いやいやあなたにはいいところがあると私が言ひましたら、そうかなとほんの浅い人格変化しかおこらないわけです。深く変わつてもらおうとしたら、深く落ち込んでもらわなきゃ困るわけなんです。そうすると死ぬとは言ひつていてるけれども、死なないと思ひつていてる限りぼくは、とめずにいるわけです。とはいふものの、実際は死ぬと言ひれるとこつちも胸がどきどきします。というのは本当に死なれたらカウンセラーとしては大失敗です。だから、そんな人格変化なんて言ひつてはいられない。そこで親にも会ひにいつて、死ぬといひつてますからとめてくださいと言ひおうとか、これはとめねばならないと、カウンセラーも決心しそうになつ

たとき、状態が開けてクライエントがさあつと変わつて来ることもがものすごく多いのです。そして、もう死ぬ気はないとか、がんばつて生き抜きますとか変わつてくることもあるのです。こういうときがこの物語りの中の床板を割つて燃やす時に相当すると思ひます。

これは、いろいろな偉い人で自殺しかけて立ちあがつてがんばつた人とか、もう病気で死にそうになつて医者から全部見放されてしまつて立ちあがつた人の伝記とか手記を皆さんは読まれたことがあると思ひます。非常におもしろい転回点というのがあるのですね。それが床板を燃やすところです。ここで、床板を燃やすファイトの残つていない人はみんな死んでいくわけです。やっぱりここで、出て来た火というものは、エネルギーともいえるし意識とも言えるし、よし、やつていこう、考えていこう、意識していこう、つまり無精者のアニマの言うままにダラダラと生きていくのではなく、ここに一つの火をともしようといふことをやつたとみていいです。そして、そういうふうなことをやつたら、貧乏神がこのこ出て来るわけです。

老 賢 者

貧乏神というののも心の中に住んでゐる一つの面白いやつですが、複雑な人格を持つていて、ある意味ではこいつがおるため

に全く貧乏になったとも言えるし、こいつがよいことを教えてくれたためにこの人はあとで、金持になるわけです。だからそういうおもしろいパラドックスをもっていて、貧乏の種にも金持の種にもなりうる男、きたなくて、年よりで、そういう最高の知恵をもった人。よくおとぎ話の中にでてくるでしょう。少年は疲れて眠りこけました。そうすると杖をついて、一人のおじいさんがでてきて、よい知恵をさずけてくれました。……というような老人、これをユングは老賢者 (old wise man) とよんでいます。old wise man という老賢者のイメージ、これは東洋人である限り非常によくわかるんじゃないかと思えます。Great Father 偉大なる父という言い方をすると、そういうイメージは日本人にはなかなかわかりにくいのですが、老賢者というイメージは皆持っているだろうと思います。

皆さんにはそういうイメージはありませんか。年をとって非常に賢くて何を聞いても教えてくれるし、なんでも知っているし、よくわかる人。たとえば皆さんは大学に入学してきた時に、一年生か二年生あたりのうちは老賢者のイメージをだれかの教授に投影することはおよそありうることです。その先生の言われることは絶対にまちがっていないように思うし、何かあった時にその先生を訪ねて行ったら、はいこうしなさいと言ってくれそうな気がする。そしてなんと素晴らしいと思って三年つきあ

っているうちに、どうもそうでないことがだんだんわかってくる。(笑い) つまり、老賢者などというのはこの世には実在しないのです。昨日言いましたように、もう一つのイメージ、たとえば原型的な子ども話をしました。archetypal child などというのはいないのです。いないけどぼくらの心の中に住んでいるからどうしてもあちこちいるように思うのですね。老賢者というのとはぼくらの心の底の底に住んでいるのです。ところがそれをわれわれは誰かに必ず投影します。ある教授とか、あるいは時には実際に会ってなくてもある本の著者とか。そして、よくあることです。本を読んだだけで著者を知らんまに年よりだと勝手に決めている人がいます。そして会ったら、若いなあ(笑い)。年もなんにも書いていないのに年寄りだと決めてる。そういうふうなことが起ります。

こういうことで非常に私がおもしろいと思っていることにたとえば老子のイメージの問題があります。老子が本当にいたかいなかったかははっきりとはしません。実際にいたかいなかったが大問題ですけれども、今はもう完全に老子というのは非常にたくさん人の心の中に生きています。いたことになってしまっているのです。道徳教という本はあるのですけども、その本はいったい老子という人が書いたのかどうかかわからない。しかし、この道徳教という本があったからそれ以来何人もの中国

人、日本人がその著者に投影して老子というイメージを作りあげてしまっているのです。そうすると老子というのは絶対にいたことになっておりますけれど、現実には一体どんな人だったのかはつきりとはわかりません。しかしそれは、皆の *old wise man* のイメージをきれいに吸収してできあがったわけです。老子のイメージというのは、どの時代からどの時代にどう変遷してきたか。研究するとおもしろいと思います。きょう昼から浦島太郎の話をしますけれども、浦島太郎の中でも乙姫の像というのは、すごく変遷するわけです。その変遷について話しますけれども、老子について考えてみてもおもしろいんじゃないかと思えます。

ところでこの *old wise man* ですが、この貧乏神は *old wise* だけでなく、ちょっとへんてこな所もあるのですね。これは実際にわれわれの心の中に住んでいる *old wise man* は、あまりにも *wise* すぎて、賢明すぎて、われわれ人間の知恵からいうとそれが当たっているのか当たっていないのか、いいことなのか悪いことなのか、時々わからないことを言う傾向があります。

皆さんは心の中の *old wise man* と話をしたことがあまりないだろうと思いますが、もしよかったら時々聞いてみたらいいかわかりません。お茶の水女子大やめましょかというところ、やめやめって言うかわかりません。(笑)

この場合、貧乏神のパラドックスという面が非常によく出ていますけれど、確かにわれわれの心の深い知恵というものはパラドックスに満ちています。簡単にスラスラわかったらぼくらの人生は、もつとうまいこといくはずですが、どうもわからんところが多すぎて本当に困ります。ここでのパラドックスは、はじめ貧乏神だったやつがここで非常な知恵を持ってきてくるという点にあります。そしてどう言ったかというところを一升買ってこい。そして一緒に飲もうじゃないか。ここでまた大事なテーマ「酒」というのが出てきます。

酒 — transform

酒はおみきという言葉もありますが、これは米の中のエッセンスですから、これは本当に *spirit* ということを示す象徴としてよく出てきます。ワインも同様です。結局米というのは土から出てきたものですけれども、それをもっと精選してその最も純粹なところだけをとったものが酒ということになりますから、そういう土からだんだん離れてもつともっと精神的な *spirit*、*rain* なものになっていくということに、酒やワインの意味があります。だからとうとう火を燃やしたところで本当の *progression* (進行) がおこってきたわけで、この老人から酒をもらいたいということは、とうとうすごいエネルギーがこの自我の中に流

れこんできたということです。

ここで、この老人は殿さまのかごに向ってなぐりこめとということをおっしゃるわけですね。これが昨日ちよつと言いましたけれどもある程度時代を反映しているところですね。殿さまに対してはなぐりこむどころか皆がおじぎしているのに、頭をあげているだけで殺されたかもわからない時代に、殿さまに向かつてなぐりこむというものすごく思いきつたことをしなければならぬ。この人も、今までの生き方のルーリング・プリンシプル（指導

原理）というのを打ちこわしてしまわねばならない。もう一度ちがう生き方、全くちがう生き方に挑戦する。今までのこの男の生き方というのは、無精者の奥さんと一緒に住んでそのながままに生きてきたわけですね。それを全くやめようと思つたら、猛烈なことをしなければならぬ。まずそれは第一に、奥さんを離縁しなければならぬ。暇を出せと言われてポツと暇をだします。それからその次に殿さまをなぐれというふうなすごい、男性として最も男性的な仕事をしなければならぬ。

王さまを殺すというのは、昨日もいいましたように大切なテーマです。そして殿さまや王さまを殺して自分が王になるというのは男子にとって一生の念願でしょうね。いつかは王を殺して自分が王になってみるというふうな願望が、我々男性の心の中にあると思います。男である限り皆あると思います。女性で

もアニメムスにとりつかれたら、必ずそれが出てくると思います。こういう願望を持っていますけれども、私の自我があつてコンプレックスがあつて、いろいろありますから、それがだんだんと自我のところまであがつてきた時にはかわつてきて、せめて学会でかつこのいいことが言いたいなと思うくらいになります（笑）。あるいは、ある女性を獲得して結婚しましょうとか。そういうようなことに変わつてきて、そしてめでたしめでたしで終わるわけです。

ところがこのめでたしめでたしにならなくて、この衝動が真正面に自我におそいかかるとどうなりますか。そして本當に王を殺して自分が王になろうと、つまりこの社会を全く変えて自分がその変えた社会の大將になろうと、などと簡単に思いますが、その時に人を殺すということはなんでもなくなりません。それで実際に想像を絶するような殺人事件が生じたりします。本當によくわかりますね。完全にとりつかれた場合というのは、人を殺したことに對するつらさとか恐さとかはなくなりません。ものすごく恐いことです。だからわれわれはそういう無意識的な元型的（archypal）いろんなものを心の中に持っていますけれども、これをなんとか人間のものにするために非常に苦労しているわけです。しかし、若い時というのはこいつにパーンといかれるわけです。そしてこういうふうにいっただんいかれ

てしまった人を、外から変えるということはほとんどぼくはできないと思います。こういう人たちを変えようとするならばやっぱり異性の力です。だから女性がいりこんでくると話がややこしくなってきました。そしてお互いに殺しあったりしなければならなくなってきました。そこでうまくいけば皆が trans-form(変容)することができるようですが、transform するところが非常に悲惨なことになってしまいます。

このお話の場合は非常にうまく transform することができません。この男。このへんが昨日から言っているようにおもしろいところで怠け者というのは、いざとなった時にがぜん活躍しだすことです。このいざとなった時に活躍しない怠け者は本当の怠け者で、これはもう話になりません。(笑い) いざとなったらがんばろうと思っていたけども、いざとなった時死んでいたというのでは話になりません。(笑) だからこの人も、貧乏神の言うことにはさからうわけにはいかないと思ったところがおもしろいところです。つまり、こういう貧乏神が出てきて命令した場合には、いくら考えても殿さまをなぐるなどということはおかしいと思うのだけれども、やっぱり貧乏神が言うならばやってみせようという。ぼくらの一生の中で時々そういう時がきます。皆さんだっ

てこのおかしい男性と結婚するのはおかしいと思うのだけれども、友だちもおかしいと言うしお母さんもおかしいと言うのだけれども、心の中の貧乏神が行けという場合がありますね。そして結婚して貧乏になりました。(笑い) その折に貧乏神の言う方がいいのかお母さんが言う方がいいのか、これを判断するということはたいへんなことです。しかしこれはやっぱりわれわれは判断し、責任をもってやっつけていかねばなりません。

この場合は判断してついになぐろうとしたが、誤って先ぶりをなぐりましたということ、よくわかりますね。これは手が震えたのですね。(笑い) 真中をなぐれなかつたのです。実際そのとおりです。実際こういうことは人生によくあります。あいつをやっつけたら絶対にいいという時に、なかなかその中心人物にあたってゆけないものです。たとえばわれわれが一番大事な大喧嘩をしなければならぬという時に、敵の大將に迫って直接に文句言ったらよいときでもなかなか言えませぬ。大將によう言わんから、けらいにちよつとやうてみたりして、やっぱり敵の中心に突撃するということは、すごいエネルギーのいることです。この床板を燃やすくらいのは、絶対だめです。しかしおもしろいのは床板を燃すまでの間に、この無精者の妻と住んでおったということです。だからこの無精者のアニマというのは、old wise manを引き出してくる仲介

になっているわけです。

ここで、この男は、殿さまをなぐってしまつてそして金を得る。そしてこの夫は最後は貧乏神を置いておいて奥さんを離縁しちゃうわけです。そして何を待たかといったら金を得たわけです。この辺が非常に問題です。というのは、そうしたらこの男は一生独身でいくのか、この捨てられた奥さんはどうなっていくのか、あるいは次はどうなるのかということになります。これはだから、おとき話というのは、われわれの自己実現の物語のはじめから終わりまでを書いているのは非常に少ないのです。どこか一部分を切りとつて書いている場合が多いのです。中にはものすごく素晴らしいお話があつて、本当に長い自己実現の物語をずっと書ききつているものもあります。たとえば「エロスとプシケ」の話などは相当長い女性の自己実現の物語が書いてあるとぼくは思います。ところがこの貧乏神は男性の自己実現のある一部分です。つまり一応まず怠け者、つまりまず「Jeeression」というところから始まつて、そしてついに転回点がきて「proression」が始まる。そして老人より得た一つの知恵を断行し実行する。つまり火とかお酒に比べると、金となつてみると自分が本当に使えるものです。ここまで獲得しえたというところで終りになっているわけです。ここからもつと話が続くならば、この人はまだ本当の意味の女性を獲得しなければなりません。

ん。今度は無精者でない女性を獲得しなければならぬけれど、それは今後のお話として残されているわけです。だからおとき話というのはそういう人間の自己実現の物語の一つの断片が切りとられてそこだけ非常に拡大して書いてあると思うのです。あるお話は非常に小さいところのことが書いてありますし、あるお話は非常に大きいところのことが書いてあると思うのです。ところで、ぼくは一時こうも思つたのです。今はもうそうは思いませんが、私が一時思つたことは、ここで男が金を獲得して女を獲得しなかつたという。むしろ女を捨てたということは、これは日本の童話の特徴かなと思つたことがあるのです。外国の場合は、王子さまとお姫さまが結婚しました、おわり。というのがものすごく多いでしょ。それに対してこちらはお姫さまを放り出してお金をもらつている方ですね。だからこれが日本の特徴かと思つたのですがそう軽々しく断定できません。日本にも結婚してめでたしめでたしという話がたくさんありますから。ただ日本の物語の中にはこういう断片を描いているのが非常に多い、つまり結婚までいかないまでの話が多いと言えますけれども、女をすてて金を得ることが日本の特徴とは言いかねるようです。しかし後で言いますように、やっぱり最後のところを結婚にもっていくのは日本人の心性としてはなかなかむずかしいだろうと思います。一人の男性と一人の女性が同等に結ばれ

creative-regression

るということは日本人にとってはほとんど不可能に近いほどむずかしいことのように今でも思います。だからおとぎ話としてもやっぱり少ないように思うんですが、それはまああまり断定的なことを言わずにおくことにします。

ところで今、貧乏神の解釈をしたわけですが、貧乏神の話をこの男性を主人公と考える。この前言ったと思いますが、おとぎ話というのは出てくる人が非常に単純なように思うけどもそれは単純なのが当り前で、その単純な人たち全部で一人の人間の心を表わしていると思うとよくわかる。貧乏神が一人、奥さんが一人、男が一人じゃなくて、あの男は自我を表わしており、その男の心の中のアニマ的な要素とかold wise man的な要素があつて、一人の人間の心を書いているのだと思うとよくわかります。それからさっき言いましたがずっとregressionが行なわれて、そして次にprogressionが生じて、ついにはこの男が、殿さまをなぐるというふうなすごい自我の強さを発揮します。こういうことを考えますとregressionということは必ずしも悪いことではないんだ。むしろこういう非常に新しい創造的なことをやるためには必ずregressionがおこらねばならないんだという事です。これは、フロイトがregressionを言い出した時は、フロイトにとってはregressionというのは非常に病的なものと思われたわけです。もちろん病的な場合が多いわけです。

しかし、そういう病的なregressionに対して新しいcreationがおこるためには必ずregressionがおこらねばならないというのをユングは非常に強調したのです。regressionの極まるころにprogressionというのが生じてきて、だからすべてそういうcreativeなprocessの前にregressionがおこるとユングは言ったわけです。ユングは早くからそういうことを言っていたのですが、それに対してフロイト派の人たちはregressionは病的だと言っていたのです。だんだん時代が変わってきましたと、フロイト派の人たちの中にもregressionの意味を認める人たちが出てきました。これも皆さんは講義で習ったかも知れませんが、フロイト派の人の中で芸術を研究したクリスとかハルトマンとか、自我心理学者と一般に呼ばれている人たちです。フロイト派の人たちの中で自我心理学者と呼ばれている人たちがregressionの中でも意味のあるのがあつて、それをregression in the service of the Ego という言葉で言いました。ぼくはアメリカに行つてこの言葉を聞いて本当に感激しました。あるいはもっと端的に言つて creative regression などと言う言葉もあります。regression in the service of the Ego というのは簡単に訳して「自我のための退行」と訳したりしています。

なかなかいい訳語がないので困っているのですが、creative regressionの方は創造的退行、これはもう、そのものピタリですね。これはなかなかいい言葉です。結局創造的退行ということはこういうことかと言いますと、私が昨日から強調してますように怠けることに価値があるといえます。怠けるのはつまり regression をおこすことによって無意識下にはいつていつてその無意識下の知恵というものをどこかで獲得して、つまり貧乏神の知恵を獲得して、ついに progression をおこした場合というのは創造的な生き方につながるという、こういう考え方はです。だからぼくは非常に好きなのです。こういう言葉がね。

ところがですね。regression in the service of the Ego と Ego がついているということは単なる regression ではなくてやっぱり自我というものをしっかり持ちながら regress している。つまりはじめのうちこの男は怠け者の奥さんと結婚して奥さんの言うままに生きておったということちょっと病的な regression にかかったわけですね。その病的 regression をやっているうちに板を燃やすあたりから in the Ego、つまり意識化するということが出てきたわけです。そうするととうとう貧乏神がやってきて、そして貧乏神の言いつけをきいてやるというのは regression in the service of the Ego から次に progression の方に変わっていったわけです。そうい

うふうに考えるとよくわかる。ところがね、Ego なし regression というものはぼくがさっき言った怠けてばかりいるやつでもうお話になりません。そのお話にならない話が、ちゃんと話に出てきまして、(笑) それがこの前にいいました「天にのぼった息子」という話です。おとぎ話というのはそういうふうにして見ますと、必ずいいのがちゃんとあるものです。昨日は言わなかったので、少し物語りをよんでみましょう。

「天にのぼった息子」

あるところに一人の若い男があった。毎日怠けてばかりいるのでとうとう親に勘当されてしまった。仕方がないのでどこぞへ奉公でもしましようと思つて歩いていると、ある家の垣の中へえいさえいさとごぼう抜きをしていた。そこで「どうぞ私を雇うてつかわりませ」と頼むとすぐおいてくれた。ある日いつものようにごぼうを抜いていると一本の大きなごぼうがなかなか抜けないので、うんというて力を入れた途端スポンと抜けて大阪の桶屋町まで飛ばされてしまった。そこで一軒の桶屋に行つて「どうかおいてつかわりませ」と言うるとすぐに承知して、おいてくれた。そこで桶のたがをはめる役をしていた。そこでとんとんとはめておつたところが桶のたがにパンと飛ばされて、東の傘屋町まで飛ばされてしまった。そこでまた「どうかおいて

てつかわりませ」と言つてそこで今度傘を持っていたら傘が飛ばされて、とうとう天まで飛ばされてしまいました。そこで天で向こうの方へ行きますと一軒の家があります。女がおるので「どうぞおいてつかわりませ」言うたら女がびっくりして「こは雷さまの家ですから今留守だから戻ってきたら聞いてあげましょう」と言つて聞いてくれた。雷が「それなら毎日わしの後からついてきて、雨を降らす役をしてくれ」と言うんです。それをやりまして雷の後からついてきてパーパー水をまいたら下界では雨が降つた言うので面白がつてどんどんどこやつていゝうちに雲を踏みはずしてやれしもうたと言つてゐるうちに海の中にどぶんと落ちます。こんどは落ちて落ちて龍宮まで行きます。龍宮で「どうかおいてつかわりませ」と頼むとですね、ちやうど庭はきがないのでやつてくれと言われるのです。それで庭はきをやつておりますと、うまそうな物が上から降つてきたのでパクンとくわえるとそれは漁師が釣りをしていたので漁師に釣り上げられます。そして大勢の漁師が人魚がつれたと言つて大騒ぎをしていると「まあほつといつてつかわりませ」と言つて、ごぼう抜きから龍宮の庭はきになるまでの話をする、漁師たちも感心して車で送つてくれたそう。それから親の言うことをきいてよく働くようになったということである。それもひと昔。これで終りです。

これは結局自我というものがはっきりとしていないわけですね。ほいほいほいほい飛ばされては、飛ばされたところで置いてつかわりませ（笑）と言つて結局最後は国に帰つて同じことです。なんにも変化はないわけです。結局 *transom* するということです。なにかありえない。というのは *regression* する時に自我の関与がはっきりしていないわけですね。つまり傘屋に行くならなせ傘屋に行ったのか、飛ばされたのだったらそれがいったいどうしたかではなく、行ったところで必ずおいてつかわりませと言つているのはいかに自我の判断抜きの *regression* を行なつてゐるか、そして結局はまわりまわつて天から龍宮までまわつて、言うてみればそれだけ無意識の世界にはいりこんでおきながら、最後のところはもとのところだったというのは非常にいい話。いい話というのはいかに怠け者というのが単なる怠け者ではなんにもならないというお話です。だから本当におとき話というのはよくできていまして、怠け者なら怠け者というのをいろいろ読んでいますといろんな怠け者が出てくるわけです。

(つづく)

後記 少し前講の内容と重複するところがあったが、ご寛容をお願いする。

子どもの生きがい

—カヨの記録から—

西村良子

子どもの生きがいについて書くようにと、編集の方からうかがった時、ふとまどいました。子どもに「生きがい」などという重い言葉が一体どうあてはまるのだろうか。ふつう、生きがいという言葉は、生きていることの価値を意識して感じる実存感や価値観をさしていて、一度否定された生に対するアンチテーゼでもあるわけです。だから、生きがいを感じることでできるのは、母胎から引きついだ自らの生命を、自らの手でしっかりと引き受けることのできる時、つまり少なくとも青年期を通りぬけたあとに得られるものと思っていたのです。

でも、子どもたちの目の輝き、躍動するような生の充実感、そんなものを思い浮かべると、それを「生きがい」と呼んでみてもいいように思われます。私がここでそのような「生の充実感」を子どもの中に探ってみようと思いました。

ところで、子どもの生きがいについて、体験から書くようにとのことでしたので、過去にめぐりあったさまざまな臨床例を

思い起こしてみました。でもほとんどの日常の中に体験する子どもの世界というと、やはり自分の子どもがいちばん身近です。ので、いささか気恥ずかしいのですが、下の娘、カヨについて書いてみようと思います。

カヨはごく小さい時から、内面を明確に表現してみせてくれる子どもでした。次女として生まれ形成された生き方なのか、それともっと以前からもって生まれた彼女特有の財産なのか、彼女は強烈に自我をつきつけてくる子どもです。だから彼女の内的な体験は比較的わかりやすいので、彼女と生活していて、私はずいぶんいろいろなことを学ばせてもらいました。

子どもの内的体験に共感するのは、実際たいへんむずかしいと思います。私は以前プレイセラピーの場で、セラピストとして子どもと遊んでいて、しばしば、子どもの中に生じてくるよろこびの表現が、共にいる私の中に起こってくるよろこびの感情とずれているのを感じました。当然のことでしょうけど、子どもと行動を共にしながらも、私の方はどうしても行動の外わくにとらわれがちで、外からみでの進歩やまとまりに反応してしまうのですが、成長を経験しつつある子どものよろこびは、真実、自己の内的体験の中で納得されるものでなければならぬようです。外からみでの、「ああよかった」「あ、よかった」ではなく、自分に納得できた「ああできた」「ほんとによかった」で

なければならぬのです。

生きがいという言葉にあてはまるような生の充実感を伴うよろこびは、まさにこのような内的体験においてのみ意味があるものだと思います。

さて、カヨの生活は、いろいろな遊びに明け暮れているわけですが、その遊びをじっと見ていますと、彼女は外界と自己の世界とを関係し合わすことに懸命のようでした。外側ほうすばんやりとしてはてしなく広がった中で、自分を中心に照らし出されたごく小さな世界のいろんな事象をいじくりまわし、つなぎあわし、切りはなす、そういう行為の連続が、次第々々にいろんなものを明るみの中にさそい出していく。その営みの中で、彼女はしばしば目を輝かせて何かのとりこになったりはしゃいだりしていました。その行為は私からみるとごく単純で、個々の行動はさほど感慨を呼びさすほどではないのですが、続けられてみると、なるほど、と思うのです。

たとえば、二歳半ごろのことですが、朝十時半になるとNHKの「おかあさんといっしょ」が始まります。彼女は十時のニュースが始まると私を呼びに来て、一緒に見ようと毎日のように誘うのです。そして説明をしてくれます。「お兄さんがね、ヤアノって出てくるよ」「ほらね」「この次はおうたのお姉さんよ」「ほらね」という具合で、その「ほらね」のところですばらし

く目を輝やかすのです。そしてその「ほらね」は次第にくわしく、アニメーションの画像の変化や、登場人物のくせに至りました。

その「ほらね」に気づいてから、カヨの遊びを見ると、彼女はそのころ事柄の予測ということになみなみならぬ関心をもっていることがわかりました。積木をどのくらい積んだら倒れるとか、どのくらいの高さからならんでも大丈夫とか、小さな一つ一つが自分の思い通りに運ぶと目を輝かせて喜んでいるのです。

事態を先どりできるということは、幼い子どもにとってたしかに重大なことにちがいありません。自分の外にある世界の動きが、たとえ一部分にせよ手のうちに入ったようなもので、自分の力で征服したその手ごたえをずしりと感じているのだと思います。

もちろん外界の事象ばかりでなく、自分自身の力が成長してきているという実感も、子どもにとってはたのもしいよろこびです。背がのびて、調理台の上が見えるようになったとか、とてもほしかった姉のおさがりの洋服が着られるようになったとか、ましてや、今までどうしても力の足りなかったことができるようになったとかいうことはなおさらです。

カヨが印象的に経験したことの一つは、ある変わったスベリ

台ですが、いつも買物途上の遊園に、登り口がはしごではなく、七〇度ほどの傾斜をもったのっぺりした板に、手すりも足をふみこむ小さな穴がポツポツとついているだけのがありました。ほとんどいづれも通るとそこへ行き排戦するのですが、登れなくてあきらめていました。がある時、一緒にいた姉がこともなげにそれを登ったのを見たカヨは、真剣な表情で発奮し、とうとう登りきったのです。スベリ台の頂上に立った彼女は両手をあげて「ワイイ ワイイ ママ見て、ここよ」とほほを紅潮させ、目を輝かせて叫びました。

自己拡大感を味わいたい気持は、時には同一視や、役割演技の中に生き生きと表現されます。

二歳前でしたが、カヨは毎晩お風呂からあがってパジャマを着ると、急いで寝室へ行き、自分のふとんに並べて敷かれている私のふとんに入って眠ったふりをしています。あとからあがった私が「あらここに寝ている人は誰かしら」といいますと、きまって「ママでちゅよ」とすましていい、私の顔を見てニコニコするのはです。私のふとんを先に占領したとか、甘えて入っているとかよりも、私はその笑顔から、彼女が私になりかわりたがっている気持を強く受け「まあ、ママはずい分早かったのね」といったものでした。このころには、抱けるお人形を赤ちゃんにして、自分が母親になる姿をしばしば見ました。赤ち

ゃんを寝かせる時にいうせりふや、おしっこをさせる姿勢などに私は自分の姿を見て、始終ドギマギしたことでした。

ところで、私が、最も印象強くカヨの心の葛藤を感じたのは、二歳を過ぎて間もなくでした。そろそろおむつがとれそうだというので、おまるをさかんに用いていたころです。

ある日突然彼女はおまるの前に立ちほだかって、立っておしっこをするというのです。姉の時にも経験しましたので、私は「カヨちゃんは女の子でしょう。女の子はおチンチンが中の方にあるから、おすわりしてしたほうがじょうずにできるわね」といつてみたのですが、彼女は毅然として立ったまますると主張し、とうとうその姿勢ですましてしまったのです。それから何回かそんなことがあり、もちろんじょうずにできるわけではなく、いつもそそうをしまいました。

それから半年もたったある晩、彼女が寝言をいつているのを聞きつけて、そばへ行ってみましたら、彼女はなんと「オチンチンがない！」と叫んでいるのです。私はドキリとしました。男根羨望という言葉は精神分析の常識だし、ボーボワールは第二の性でその体験を述べています。しかし目の前の三歳にならない子どもの口から無意識とはいえ、はっきりとその言葉を聞いて私はたじろぎました。そして眠っているカヨの頭をなでながら「そうね、カヨにはオチンチンがないわね。そうね。ほん

とにそうね」とオロオロしていました。

三歳少し前から、彼女は外へ友だちを求めて行きたがりました。が彼女は男の子にひどく偏見をもってこわがり、またしばしば男の子にいじめられて泣きました。そんな状態がしばらく続いたので、これには私も親として何とかしなければならぬと心を痛めていたのですが、三歳をすぎて少ししたころ、彼女ははればれとした顔で「カヨちゃんね、女の子でしょ、だから大きくなったらパパと結婚ちゆるの」と宣言しました。

それからの彼女はさかんに「女の子だから」といっておしゃべりに気を使い「早く大きくなってパパと結婚しなくちゃならないから」ご飯もたくさん食べるし、私の料理の手伝いをしたいし、お勉強もしくちゃならないというのです。あまり真剣なので、しばらくはいいそびれていたのですが、ある時私が「カヨちゃん、パパはね、ママと結婚したでしょ。だからカヨちゃんも誰かの人と結婚した方がいいとママは思うのだけど」といってみました。そしたらカヨの顔はみるみる曇って大粒の涙を流し、次いでワァワァと泣くのです。びっくりした私は、「そう、カヨちゃんはそのなにパパと結婚したいの、そうだったの。ママ、わるいことになってしまってゴメンね」とあやまったものでした。彼女はありとあらゆるものを女のもの男のものに分け、色も男色、女色ときめ、私がスラックスをはくと「ママは女だ

のにどうしてズボンをはくの」と批難し、自分は頑としてスカートだけはきました。女はこうと作りあげた自分のイメージたちがう女の人がテレビに出てくると「アハハ、あの女だのにおかしいわあ、アハハ、アハハ」と笑いました。

今、四歳をすぎて、彼女は聞かれると「大きくなったらパパよりもっとかわいくて、もっとやさしい人と結婚する」といい、時に好んで年長の男の子の中にまじって喜々と遊んでいます。

彼女の男根羨望の葛藤もどうやら無事落ちついて私はほっとしているところですが、このことを経験してから、私は子どもの心に生起する問題の大きさと、それに真すぐに、的確にしかも真剣に立ちむかっていく子どもの心の力に驚いています。

外から見ているとるに足りないような小さな喜びも、また驚くような葛藤も、共に子どもの中の心の中では連続したそれぞれの文脈の上に意味をもち、それを正直に感じ、生きぬいていく中に子どもの中の成長があり、その成長を実感をもって感じる充実感が子どもの生きがいであるといえるのではないかと思います。カヨは今あらたに、人間がどうしてできるのか、死ぬとはどんなことなのかといういわば「死と再生」の問題にとりかかっているようです。(身近に祖父母の死を見ましたので……カヨにしては少し早かったように思いますが)生きがいなどといっていられないほど忙しいといっているような気もして来ます。

幼稚園にのぞむ

聴覚・言語障害児と幼稚園教育

斉 藤 幸 彦

先生、幼稚園がみつかりました！

A子は、今年六歳で元気に小学校へ入学することができました。た。

しかし、三年前に母親に手をひかれ、教室を訪ねてきたころは、ことばもほとんどなく、わずかに話せるいくつかのことばも、母親にしかわからない状態でした。

A子が生まれたときは、三六〇グラムのよく太った元氣な赤ちゃんでしたが、たびかさなる四〇度近い発熱とひきつけで、育てるのに苦労したそうです。二歳になって、やっと身体も丈夫になり、ほっとしたのですが、なぜかことばをほとんどしゃべらず、大きい声で呼ばないと振り向いてくれない子になっていたのです。

それから一年、いくつかの病院を訪ね、耳が遠いことを知ら

されました。

幸いなことに、耳が遠いとはいえ、補聴器を使えばある程度ことばも聞え、話もできるようになると約束されたのですが、それには聞こえとことばの特別な指導を受ける必要があると言われ、私たちの教室に相談にみえたのです。

当時の私たちの教室は、幼児は指導の対象児になっていませんでしたが、A子のようすは指導を断られる状態ではありませんでした。

A子には、聞こえとことばの指導を、母親には、補聴器の使用の方と家庭におけることばの育て方から指導を始めました。

補聴器は三ヵ月もすると使えるようになりましたが、ことばは、そう急には育ちません。また、A子は独り子であるうえに、家の近くには友だちになれる幼児がなく、ことばばかりか、社会成熟も遅れていました。

そのうえ、三歳を過ぎたA子に、母親ひとりでことばを育てることは無理です。ことばを育て、社会成熟を促進させるには、同年齢の友たちがぜひとも必要でした。

それには、三歳保育をしてくれる所がよいので、母親といっしょにいくつかの幼稚園を訪ねましたが、三歳を理由に、どこでも断られました。しかし母親は必死にいきがって、来年の入園予約でもとせまったのですが、どこでもいろいろよい返事をしてもらえませんでした。

そうしているうちに一年が過ぎ、また、母親と私たちの幼稚園参りが始まったのですが、こんどは「満員である」そんなお子さんをあずかたことがない」「他のお子さんに迷惑である」「危険で責任がもてない」などの理由で、面接もしてくれない幼稚園さえありました。しかし、少し遠い幼稚園でしたが、理解のある園長にめぐりあえ、入れてもらえることになりました。それからの二年間、母親はまもなく生まれた弟を背負い、幼稚園と私たちの教室に通い続けました。幸いなことに、受け入れてもらった幼稚園の園長や先生方は、若く意欲的で、A子を暖かい目で見守ってくれました。

しかし、誰よりも、素直に、よく理解してくれたのは、同年齢の子どもたちでした。初めは、A子を奇異な目で見ていましたが、耳に変なものをつけ、ことばがよくわからない程度で、

自分たちと同じ子どもだということがわかると、子どもたち同志の遊びには、A子の耳が遠いことも、ことばが不自由なことも、さして支障にはならないようでした。A子が今年、元気に就学できたのは、母親の努力や私たちの教育援助もさることながら、よき幼稚園と、先生と友たちに恵まれ、遊びや学習の中で、生きたことばを学び、社会性を育てることができたからでした。

お話が、じょうずになりますよ！

私たちの教室を訪れる、ことばや耳の遠い子の教育を始める場合、まず第一の難関は、その子を受け入れてくれる幼稚園をみつけることです。このことは、障害児教育全般についても言えることですが、障害児という名の示す如く、この子らは何らかのハンデキャップをもっています。そのハンデキャップのために、普通児とは違った教育も必要ですが、概して、そのハンデキャップは、その子の全生活を規制するものではなく、一部にしか過ぎない場合が多いものです。そのハンデキャップを過大評価し、またハンデキャップのために二次的に発生したもので、ハンデキャップとして扱い、そのために子ども本来の発達を阻害し、かえってハンデキャップを重くしてしまう場合が多々あります。

私たちが、聴覚・言語障害の幼児を幼稚園におねがいする場合、よく言われることは、「そのようなお子さんを普通児の中で教育することは、お子さんがかわいそうではないか」。また、「もっと他に、このお子さんにあった教育機関に入れられるほうがよいのではないか」とも言われます。

はたしてそうでしょうか、聴覚・言語障害児は、耳が遠い（難聴）ためにことばが育たなかつたり、不自由になつたりするのですが、耳が遠いと言つても、補聴器をつけても、ほとんどことばを理解できない重い難聴から、補聴器を使用しなくとも、やや大きめの声で十分に耳だけのことばを理解できる軽い難聴まで、いろいろです。ひどく耳が遠い場合は、ろう学校で特殊な指導を受け、ことばを学ぶ必要がありますが、補聴器を使えば、ある程度ことばが聞き分けられる場合は、補聴器の使い方やことばを聞き分ける訓練、聞こえない部分を補うための視覚を中心とした総合判断力を養いながら、正しいことばを適切な場面で学習する必要があるのです。それも、「教えるーならう」という関係ではなくて、生活や遊びの中で、生きたことばを学習することが、ことばを育てることになるのです。

耳が遠い、ことばが不自由だから何か特別な方法で、ことばを教えよう話させようと考えるのではなくて、耳が遠いから、補聴器をかけて普通の生活に適應するように育て、ことばが不

自由だから、普通の子ども以上にたくさんのことばを聞かせ、話す機会をあたえるようにしてほしいのです。それには、幼児の集団（幼稚園または保育園）の中で生活することが最も効果的なのです。

幼稚園の先生は よい方ばかりでした！

現在、私の教室で指導している、二十名の低学年（一年生から三年生）の母親に、幼稚園時代のようすを聞いてみました。

全員、一年以上の幼稚園生活を経験させた方ばかりです。保育期間については、十六名の母親が、希望した保育期間でしたが、四名の母親は、障害のために保育期間を縮めざるを得なかつたと述べています。

「お子さんを幼稚園に入れて、よかつたと思いませんか」と言う問いに対して、

「よかつた」と全員の母親が答えました。

「集団生活ができるようになった」「ことばがじょうずになつた」「友だちができた」など、家庭では育てることができなかったことを、幼稚園で育ててもらつたということです。

「幼稚園の先生方に対してどう思いますか」という問いに対して、

「よい先生方でした」と全員の母親が感謝の意を述べていま

す。

「どうしてですか」と重ねて質問すると、

耳が遠く、ことばも不自由だった子どもをあずかっていただけで、先生方には余分の苦勞をおかけした。「幼稚園に入れてもらえなかったら、普通小学校には就学できなかっただろう」幼稚園にあずかっていたことは十分に感謝にあたいすると述べています。

「お子さんをどんな形で入園させましたか」という問いに対して、

普通の入園面接またはテストで、入園を許されたのは九名。事前に入園させてくれそうな幼稚園をさがし、特別に園長に事情を話して入園を許されたのが七名。入園を断られたが、次の幼稚園で入園させてくれた、二名。三個所の幼稚園で断わられたのが二名でした。

幼稚園によっては、事情も聞いてもらえず、面接もしてもらえなかったところもあったと訴えていました。母親の、幼稚園や先生方への感謝に反して、入園は楽ではなかったということです。

お宅のお子さんは 言語障害ですね？

私たちの教室には、幼稚園の入園テスト期になると、幼児の

相談ケースが急に増加します。母親は、わが子のことばは気にしていないかったのに、入園テストでそう言われ、びっくりして相談にみえるのです。また、そう言われたので、「はっきり話さない」「もう一度言ってごらん」と、注意していたら、だんだん話さなくなってきた、どうしたらいいでしょうと言う母親もいます。

お会いしてみると、たしかに、ことばの不自由があるのですが、幼稚園では、そのことばの不自由に対する扱い方や処置については話してもらえず、障害を指摘されただけに終わっているケースがあるのです。

言語の障害は、適切な指導と扱い方によって改善できますが、その障害のために、話さない子ども、言語のコミュニケーションに不安をもつ子に育ててしまつては、人間関係すらくずしてしまいます。特に言語の発達段階の途中にある幼児には、「言語障害」ということばを使うには、慎重であらねばならないと思います。その子のことばを不審に思われたら、一日も早く、専門機関、専門家を紹介し、その原因を取りのぞく努力を重ね、ことばの育て方を誤らぬよう、十分に母親に話していただきましたと思います。

(横浜市立東小学校教諭 ことばの教室)

幼児の友だち関係の発達について

— 砂遊びを中心として —



石坂昭子
藤谷美佐子
倉田麻美子

四月に新しい幼児を迎え、今年こそは“と意気込み、期待と不安のいりまじった気持ちの中で入園式を迎えます。教師である私たちがこのような気持ちをもつと同じに、幼児たちの方でも、はじめて自分を迎えてくれる幼稚園という新しい環境——教師も含めて——に、どんなにか不安と期待をもっていることでしょうか。この幼児たちを迎えて教師としては、一日も早く幼稚園になれ、集団生活の中で安定感をもって遊べるようにしたい、のびのびと行動する中で、はっきりと自己を主張し、また、相手の気持ちも受け入れて、協力していくことのできるような幼児になってほしいなど、さまざまな夢を託して、幼児の成長を願う気持ちでいっぱいです。

そのためには、まず教師と幼児とのふれあいが十分満足されることが大切といえましょう。それを基盤として友だち関係も芽ばえてくるのではないのでしょうか。また、幼児は幼児たちの中で発達していく過程において、お互いに要求を出し、ぶつかりあいながら、その中で教師の援助によって、好ましい人間関係が育っていくのだと思います。

そこで、今日は、はじめての幼稚園という集団生活に入ってきた幼児たちが、どのようにして友だち関係をつくっていったかということ、砂遊びという場面を通して見ていきたいと思えます。

幼児は、いろいろなものをつくり出すということが大好きで

す。それは自分の中にもっているものを表現することによって、情緒や表現意欲を満足させることになるからです。そのために、柔軟性を持ち、変形のできる（可塑性のあるもの）素材としての、水、土、砂などは、とくに好まれます。なかんずく砂は、にぎったり、ほったり、高くつんだりといういろいろなことにより、もつとも素朴な基本的な要求を満足させることができるし、そのなかに、自己を没入することによって、情緒の安定をもたらすことができます。また、砂遊びでは、平行遊びが何らの抵抗もなくてできる場所とあります。そして、時には、他の活動での人間関係における要求の不満を、砂遊びを楽しむ満足することにより、情緒の不安定を自分で治療するということも、無意識の世界でしていることが多いともいえます。それから、砂遊びは一日の幼児の生活のリズムの中で、要求に応じて自由にとりくめるといふ特色をもっています。つまり、ウォーミングアップ的にするということも可能であれば、それに本気になってとりくみ、一日の活動の中心をそこでですぐすということも可能であります。また、ウォーミングアップのつもりが、いつのまにか、本気になってとりくむことになるということもあるし、同一時間に、同じ場面にいる幼児たちにと

って、砂遊びは、ひとりひとりの幼児の要求に応じて満足を与えることが可能である遊びです。

そこで、砂遊びを通して、その中で「友だち関係がどのようにめばえ、生まれ、育ち深まっていくか」ということを中心に、一学期における友だち関係を中心にして、以下に実践の結果をみていきたいと思えます。

(一) 教師とのふれあいによる安定の中から 友だち関係のめばえができる

入園式の日、母親の手からはなれたばかりの幼児たちには、幼稚園では何をしていいのかということに対する不安は、たいへんなものでしょう。大部分の幼児は、どのようにして遊んだらいいのかという不安で、うろうろしてしまいます。こんなとき「砂場で遊びましょう、いらっしやい」とそばにいる幼児たちによびかけて、教師もいっしょに砂遊び場に行くと、半べそをかいていたE夫も、N子もみんなといっしょにきました。そして教師自身がどっしりと腰をすえて「さあ、山つくる？ それとも川にする？」と話しかけながら砂を高くつみはじめると、他の幼児らもいっしょになって大よろこびで「山にしよう」といいながら、一生懸命につくりはじめます。そして、だんだん

泣きべそ顔が笑顔にかわっていきます。砂というもつとも抵抗のない遊びへのさそいは、N子をすっかり安心させたようです。また、「先生もいっしょに砂遊びをしている」ということでいっそう安定感をもったようでした。教師と幼児とのふれあいはず大切であるといわれますが、教師が幼児の近くにいるほしいという感情を十分認めてやり、本気になって、いっしょに遊んであげるということを常に心していかなければならないと思いました。

一方、E夫はどうだったでしょうか。E夫もいっしょに砂場へは来ましたが、みんなと同じようにすわりこんでいましたが、よくみるとただ砂をいじっているだけで、まだ、自分を出して遊ぶところまではいきませんでした。同じように、砂場にすわりこんで、一見、いかにも楽しそうに砂遊びをしているかに見えるこの光景も、ひとりひとりの幼児をよく見ると、必ずしも同じではありません。やはりひとりひとりの幼児について、どのように指導するか判断をあやまらないようにしなければならぬといつくづく思いました。

たくましく手全体でどんだん砂をもちあげていくA夫たち、たくましいとまでいなくても、砂をまるめたり、たたいたりして、砂を使って十分自己を表出して遊んでいるという感じの

N男たち、その中にまじって、ほんのおしるしに砂をいじっているだけのE夫のような幼児たちも、よく見るとまだまだたくさんいました。教師としては、一見、砂遊びを楽しんでいるかのように見えるこれらの幼児たちの行動を、ただ表面だけとらえて、「元気に砂遊びをしているから安心」といった安易な気持ちで、見おとしていたのではないかと、このことを強く反省させられました。

入園当初、砂遊び場へさっさといって遊んでいる幼児たちは、砂遊びをしているから安心とばかり、ついついその幼児たちと人間関係が少なくなり、かえってあとに問題を残すことになるといわれているのは、このE夫らのような幼児たちを見おとしていることにも原因があるのではないかと思われました。

その後、E夫は相変わらず、砂いじりをしているだけの状態が続きましたが、砂場にいうただで安定感があるのでしょうか。砂場については、すわりこんでいるのです。誰と話すのでもなく、誰の仲間というのでもなく、他の友だちとは何の交渉もないような、また他の友だちのことは一向無関心のような存在で砂をいじっているだけなのですが、他の幼児たちが「やめようか」とひきあげていくと、E夫もやっぱりやめていくのです。

このことを見たとき私は、はっとしました。何のかわりあ
いもなく、ひとりりで遊んでいるかみえる、このE夫も、決し
てひとりではなく、みんなと同じ砂場にすわり、砂をいじって
いるだけでE夫は満足し、友だちといっしょに遊んでいるのだ
という気持ちを中心の中で感じていたのだなと思いました。友だ
ちと遊んだという経験をあまりもたないE夫にとっては、この
砂遊び場は、絶好の安定の場であり、ただみんなといっしょに
いるというだけで十分だったのです。

ともすると、早く友だちをさがしてあげたいという気持ちか
ら、教師が先まわりをして「Aちゃんと仲間ですてみたら」な
どといってしまうことがあり、E夫の場合も、そうしてあげる
ことがE夫のためだと思っていました。が、じっくりと見つめて、
あわてたことをしないでよかったですと心の中で反省しました。

待つ“ことの大切さを痛感させられたひとこまでした。そし
て、教師がこのE夫をそつと見守ってやる中で、E夫はりっぱ
に、自分の力で、ひとりだちできる幼児に成長していくのだと
つくづく思いました。

□ 友だち関係は、偶然の機会の中から
生まれる

砂遊びでは、グループもできやすく、友だちを求めることが、
他の活動に比して早い時期にあらわれるのが特長のひとつです
が、入園して一か月くらいもすぎると、そろそろ、グループ
らしいものができてきます。A子、T子、M男の三人がかたまっ
て、砂いじりできれいな砂つくりをはじめました。「このバケ
ツにいっぱいきれいな砂つくり」とA子がいい、T子も賛成
して砂つくりがはじまり、たまたまそばにいたM男も仲間に入
ったというわけです。そのうちに他の幼児たちにも流行して、
きれいな砂つくりは大繁盛、砂いりのあるだけを使つての盛況
ぶりになりました。すると、自然に「石ころができるわけです。
「だれか石ころ集める人になってほしいわ」とA子がいいまし
ました。みんなは砂いじりがおもしろくてすぐに応じられませ
ん。そのとき、ふと私の眼にとまったのがI美でした。

I美は同じ町から三人の女兒が通園していて、たまたまひと
りだけ別の組になったため「家に帰ってからも、遊んでもらえ
ずかわいそうなので、同じ組にしてもらえないでしょうか」と
母親から訴えのあった幼児でした。でも、そのことに負けずに、
何とかしてI美が本来の姿になって、元気に友だちと遊べるよ
うになってほしいと願って、そのチャンスを見つければと
思っていた矢先でした。

私はとっさに「I美ちゃん、石ころやさんがいなくて困っているから、先生といっしょに石ころやさんしましょうか」ときそってみました。I美はにっこりうなずいてうれしそうに教師のそばにやってきました。教師もいっしょに石ころやさんになってあげたので、いっそううれしかったのでしよう。「ここに入れてください」とみんなに声をかけて石ころやさんの役割を果たしはじめました。「はい、石ころやさん、これいれて」

「ぼくのもはい、いれてください」とつきからつきへといわれ、I美は大いそがし、しょんぼりしていたようなI美の顔がみるみるいきいきとしてきました。もう教師がそばにいないとか、いないとかは問題ではないといった表情です。私もほっとしながら、そっと見守っていました。

でもそのうちに、少しあきてしまったのでしょいか、砂遊び場をはなれて、ブランコにのりにいってしまいました。私は「せっかくあんなに喜んでみんなの中で遊ぶI美を見られてうれしかったのに」とちよつとがっかりしましたが、すぐに呼び戻したりせずようすをみていました。するとI美がいなくなつたのに気づいたT子が「石ころやさん、早くきて」とI美に向かって声をかけたのです。すると「はい」と大きな声で返事をして、また砂遊び場にもどり、石ころやさんの続きをしてく

れました。

そしてこのことがあってからI美は、見違えるように、明るい表情で登園するようになり、みんなの中にとけこんで遊ぶことのできるI美になりました。みんなの中で受け入れられたという自信で、こんなにも変わるものかと改めて感じさせられました。砂遊びの特性をいかして、友だち関係を結びつける機会を、その幼児たちのまわりから見のがさないことが必要であり、保育という必要の場面の中に、偶然性があるということ、つまり、機会としては、偶然ではあるが、それは、幼児にとっては、必然的な発達であるということを、保育の中にかすということとが、指導の重大なポイントではないかと、改めて感じさせられました。

③ 教師や友だちに受け入れられたことに

よって、人間関係に入る

「先生、S君は保育園にいたときも、わるいことばかりして、先生に叱られてばかりおったんやに」とか「先生、またS君、私たちのつくった家こわしたに」「S君は乱暴やできらい」という会話が、入園して二カ月もたつとぼつぼつ見られはじめます。それは、幼児の個性がはっきりしてくるため、友だちに対

するすききらいがでてくるからでしょう。このころは、入園当初とは別の意味で、友だち関係がかわってくる大切な時期になつてきます。教師としては、Sの気持ちを受容してやりたいと思いつつも、つい乱暴な行動をとられたり、みんなの遊びを乱すような行動をとられたりすると、どうしても感情的になつてしまいます。そんなある日、Sが「先生、大きい山つくつたのに見に来て」と私を呼びにきました。こんなときのS君は別人のように素直でごく普通の幼児にみえます。

この幼児もやはり、教師に認めてほしいという要求をもっており、それが強かったあまり、かえって教師を困らすような行動をとっていたのかもしれない。そしてこれまでの教師との人間関係が十分でなかったことを反省させられると同時に、教師があの子は問題児などときめこむような偏見をもって接してはいけないのだということをしみじみと感じさせられました。「先生すぐみせてもらいにいくわ」とさつと砂遊び場に行くとなるほど大きな山ができていてSの額には汗がにじんでいます。「S君ひとりでしたの?」「ひとりとちがう、HちゃんやU君もいっしょにしたん」とうれしそうです。

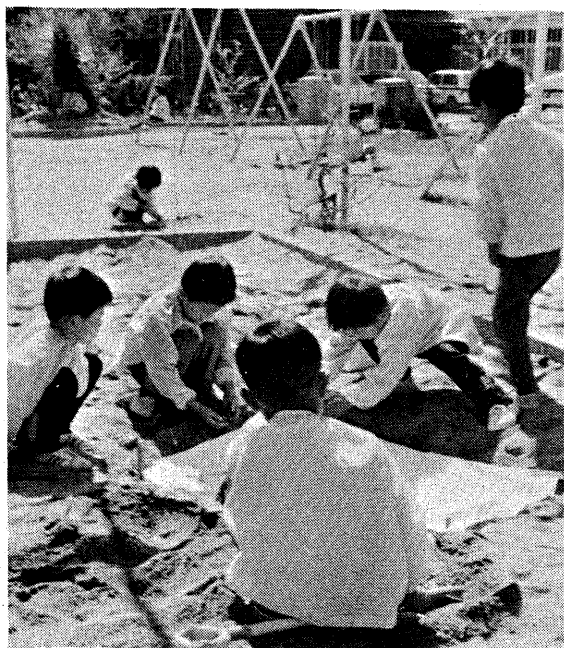
HやUは、一生懸命に山の続きで、川のようなものをつくっていました。そしてSはその幼児たちに向かって「水くんでき

ようか」と呼びかけました。「そやな、水くんできてくれる」「うん」こんな会話をかわしてSは水くみにいきました。もう誰からも批難されたり、攻撃されたりしていません。山をつくらうというひとつの目的に向かって協力できるという砂遊びに救われて、S君もやつとみんなの中に入ることができるときかけをみつめたようでした。「先生、ここにトンネルつくろうか」Sは教師ともみんなにともつかず、賛成を求めました。みんなは「うん、そうしよう」とSの提案を受容し、今度はトンネルがはじまりました。「先生大きいのにしよう」「S君、もっと下の方からせんとくずれるぞ」「ちよつと水つけようか」こんな会話をしながら、トンネルほりがはじまりました。

だんだん両方から近づいていきます。「もう少しがんばって」私も手に汗を握るような気持ちで、このトンネルつくりの成功を願いました。

「先生できた。Hちゃんの手と握手したに」Sのうれしそう
なはずんだ声がかえってきました。

「よかつたわね。先生にもさせて」私もいっしょに手を入れました。S君の手と固い握手、何か今までとはちがったS君への親しみを覚えました。S君の顔も喜びにみちあふれていました。そしてみんながかわり番に、トンネルをつくっては握手



で喜びあうという遊びが展開し、砂遊び場いっぱいに山ができて、川ができ、トンネルができ、橋ができてというように、遊びを展開することができました。

入園して二カ月という段階でこのような遊びができるのは、砂遊びならぬことであり、集団の人数も途中でへったりふえたりはしますが、その変動を気にしないで活動が続けられるという、すなわち、集団の構成も可塑性にとんでいるという砂

遊びの特性によるといえましょう。そして、自分のつくったトンネルの中の教師との握手、友だちとの握手による身体接触は、幼児たちの人間関係を深めていくのに、とても必要なことであり、この身体的な接触を通してのからだと心のふれあいは、もっとも大切にしていかなければならないと思うのです。

四 しだいにグループ内での人間関係が、 深まっていく

KとNとYとOは、すでに保育園からのつながりがあるので、比較的早くから、グループ遊びをはじめた幼児たちであるが、六月のある日、その日も、朝登園するとすぐ砂遊び場にとんでいって、大きいスコップで穴ほりをしているようで、そのうちにKが「先生、大きい紙ちょうだい」といいにくる。「何するの」「何でもええで、はようちょうだい」「秘密やもん」といって紙をもらうと一目散に砂遊び場にもどっていききました。「秘密やもん」といったひとことがいかにもほほえましく、遠くからようすを見ることにしました。

Kが紙をもっていくと、さっそくほった穴の上に広げています。どうにか穴がかくれると、その上に砂をのせて穴がわからないようにしています。Nが砂のかけ役で、あとの三人は一生

懸命紙のしをおさえ、「そつとのせやなあかんに」「うん」

「はしつこの方からのせやなあかんに」など口々に注意しています。それでもうまくいかないようです。「ぼくがかけるでN君もつとて」と今度はKがかけ役になりました。Nは少し不服そうな顔でしたが、それでも、もち役にかかりました。

そして何とかおとし穴を成功させようという気持ちで四人が力を合わせているようですが、ありありとみられました。そのうちに、Y一が「これでおさえよう」といって、くいのようなものをたてて紙がおちないようにすることを提案しています。Y一は「なあ、ぼくええ考えしたやろ」と得意顔です。

できあがると「だれにもいうたらあかんに」とうれしそうに顔を見あわせています。グループ内での秘密が守れるという仲間関係ができてることががわれました。

そのうちに「先生、ちょっときて、ここ通ってみて」と手をひいてよびにきました。「どこを通るの」といわれるままに砂遊び場にいき、穴の上を歩くと見事にはまってしまいました。

「わあ、おどろいた」と大げさにおどろいた表情をすると、手をたたいて大喜び。四人の秘密は見事成功ということで満足感にあふれ、どの幼児の顔も輝いていました。

このような遊びは、自分を出し、ぶつかりあいながらも、協

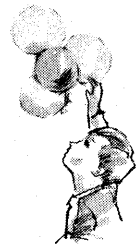
力してひとつのものをつくりあげるといふ、強いグループ内の人間関係を通して経験することがができるわけです。砂遊びはこのような幼児の要求を製作活動などに比して、早い時期に満足させることのできる特性をもっていますし、ひとりひとりの幼児はその中で情緒の安定を得て、しだいにグループ内での人間関係を深めていくということがいえるのではないのでしょうか。

以上、一学期間に見られた砂遊び場での幼児の活動を通して、友だち関係の深まりをみてきましたが、日々の保育のあらゆる場面でも同様に、いろいろな形で、友だちとぶつかりあい、その中で、時には逃避したり、攻撃的になったりしながらも、教師がそれらの幼児の感情を受容してあげることによって、よりよい友だち関係がつくられていくということになりました。また、そのための援助ということが大切だと思います。

幼児が集団の中で活動することにより、満足感をもたせることが、結局のぞましいパーソナリティを形成していくことになり、それが幼児の友だち関係をより発展させていくことになるのではないのでしょうか。

(四日市市立納屋幼稚園・同神前幼稚園)

「幼児教育の源流」について



莊 司 雅 子

幼児教育の父、幼稚園キンダーガルテンの創設者は、ドイツのフリードリヒ・フレーベルであります。幼児教育の重要性についてはフレーベルのほかに、多くの偉大な教育思想家が強調しています。これらの思想家の書き残したものを読むたびに、わたくしは今日において実践され、実現されていなければならないのに、いまだそのままになっている、幼児教育に関する多くの基本問題が既に示されているのを見いだすのであります。

わが国の幼児教育は近年とくに量的に発展してきました。特
に中教審の報告以来、人びとは幼児の能力開発に心を注ぎ、幼稚園や保育所において、早期教育といって、読み書き算数の詰め込みや、覚え込ませる教育を始めているところがふえていますようであります。幼稚園とは今や小学校の縮図であり、小さい兵隊の養成所になりつつあるときいています。わが国の幼児教

育はまさに混迷状態におちいつております。これをみて心ある人びとは、「真の幼児教育とは何か」、「幼児教育の原点にかえれ」と叫んでいます。たしかに大人たちによって、今日の幼児はあつちに引っぱられ、こつちに引きまわされています。真の幼児の姿がだんだんみられなくなるのを憂う多くの識者をわたくしは知っています。

こうした幼児教育界をみて、わたくしは、大思想家の教えをさぐり、今日の問題を解決する糸口をもとめてはとと思い、若き有志の学徒と共に、ここに「幼児教育の源流」を連載してもらうことになりました。この試みが明日のわが国の幼児教育のため、いささかでも貢献できれば、執筆者の喜びはこれ以上ないと思います。

(広島大学教授)

「幼児教育の源流」Ⅰ

ジョン・ロックの幼児教育論

山根祥雄

まえがき

最近の幼児教育改革をめぐるさまざまな論議の主要な論点の一つは、幼児の能力開発に関する問題に集約されているように思われる。教育というものが本来すべての人間のあらゆる側面における能力開発をめざす以上、わが国の幼児教育実践がとくに戦後ひろく普及された今日、幼児の早期能力開発が問題にされることは、幼児教育の再検討ということからは好ましいといえるかもしれない。むしろ幼児教育の現状は、幼児の能力を十分に開発させるほどに条件整備されているとはいえない。さらに、過去の文化遺産の継承という側面からは、諸科学の成果をふまえ、しかも子どもの発達に相応した教育をできるだけ早期から施すことは、十分に首肯できるし、また積極的になされるべきものである。

それにもかかわらず、この早期開発説にもとづく幼児教育改革には全面的には賛成しかねるものがある。なぜかといえば、

早期開発の立場はかぎられた範囲、とくに知育に重点をおいて主張されており、むだのない教科的な詰め込みを強制し、幼児の知識獲得の効率化を促進し、それを子どもたちの能力開発と解しているからである。幼児に早期からむだなく詰め込み教育を施すことで幼児教育の改革がことたりるとするならば、これは幼児にとって悲劇であるにちがいない。しかもこのとき、幼児の能力開発がすべての幼児に、それぞれの条件に応じて公平になされ、この方針に従って実施されるならば問題は無い。しかし現実には能力開発は、人間を能力なり学歴なりによって選別する能力主義にうらうちされている。さらにこの種の能力開発教育のいきつく先は、社会人の養成というよりは、むしろ特定の職場の専門家の養成である。たとえこの能力開発が個々の子どもたちの能力や適性に応じてなされるとしても、よほど注意してかからないと立身出世主義に墮していく。これが悲しいかな、日本の現実ではないだろうか。

このように考えて、幼児の能力開発はなによりもまず幼児の

側に立って発想されるものでなければならぬと思う。さらにこれほど流動的で情報の豊かな現代において知育だけではなく、もつとあらゆる側面における子どもの能力開発論でなければならぬと思う。この点に関して幼児の全面発達を説く立場の幼児教育論は、幼児教育改革の一つの展望を与えてくれる。現在まさに個々の幼児の全面的な発達の可能性の問題、つまり幼児の生活現実を尊重し、学習を保障する教育の実現の問題、こうした問題が正面にすえられねばならない時期にきている。さらにいうならば、人間の教育のあり方という根源的で本質的な視点からの幼児教育の復権がはかられねばならない。そしてここにこそ、幼児教育改革の出発点が求められねばならないと思う。

ところで幼児の生活現実を尊重し、かれらの学習や発達を保障する幼児教育には、子どもの権利という側面から、次の三点が要求される。まず第一に幼児を人権の主体としてとらえること。さらに、おとなとは異なった発達の可能態としての幼児の権利を明らかにすること。つまり、それぞれの発達の節々に固有の意味をみとめ、発達そのものを目的とみなすことである。

第三に、発達の可能態としての幼児が、新しい世代として古い世代をのりこえる権利をもっていることを意味づけることである。⁽¹⁾要するに子どもの権利にもづく幼児教育は、幼児の全面的な発達と学習の権利を保障する教育である。

こうして、幼児の早期開発は、幼児の権利に根ざして、ひとりひとりの幼児の幸福追求という観点から、幼児のあらゆる能力の発達と学習の権利が保障されるかぎりにおいてなされるべきものなのである。

歴史的に言えば、幼児の教育が幼児の生活現実からそれ自身固有なものとして自覚されてきたのは、だいたい西洋においてであり、しかも近代に始まったのである。ロックは、コメニウス、ルソー、ペスタロッチー、フレーベルなどに代表される近代思想家とならんで、幼児の早期教育を重視した人であった。いまだ十分でないとはいえ、近代のはしりとしてのロックの幼児教育思想は、幼児教育を幼児の権利としてとらえる原型をはらんでいる。かれはいわゆる「ジェントルマン」の教育思想家であっただけではなく、近代の幼児教育思想の基本的な問題をたくみに整理している。本稿は、ロックの幼児教育思想を、幼児教育観、幼児教育の内容、幼児教育方法、幼児教育環境および教育者の四領域に大別して検討していきたいと思う。

一 ロックの幼児教育観

十八世紀人の思想的常識とまで仰がれたロックが、すでに十七世紀にあって、政治論・経済論・宗教論および哲学論などとほぼ同一の地平で教育論を展開し、幼児教育論を摸索している

ことは、幼児教育思想の構築にとつての重大な貢献なのである。ロックの幼児教育への着目は、人間の生涯にとつて幼児期の教育が決定的に重要であるということをも鋭く認識したことに由来する。またかれに幼児教育の目を向けさせたのは、シャフツベリー伯との出会いであり、かれの息子の教育に当たつた教育実践の成果が、書簡の集大成としての『教育に関する考察』であることはよく知られている。

ロックの教育思想は、哲学論にもうかがえるように、すぐれて習慣形成を基調とするものである。そのためにロックみずからが、幼児教育を自己の教育思想のなかで独立した一領域として明確に位置づけていなくとも、幼児教育思想がかれの教育思想の基底をなしていることはむしろ当然のことである。

ロックにいわせれば、「教育こそ、人間の間に大きな相違をもたらすもの」であり、「敏感な幼年時代に与えられたわずかの、いいかえればほとんど感じられないくらいの印象が、非常に重大な、また長続きする影響を与える」⁽²⁾のである。こうした樂觀主義的な教育観に立つロックは、幼児教育の要点を、幼児期の正しい習慣形成にあるとしている。それゆえに「子どもたちにせひなされねばならぬと考えられることは、機会あるごとに欠くことのできぬ練習によって、子どもたちの身につけさせなさい。こうすれば、子どもたちに習慣をつけさせ、習慣は一度

できると、記憶の助けがなくても、ひとりでに容易に自然に作用するもの」⁽³⁾なのである。しかも幼児の習慣形成のさいには、幼児の自己活動および活動衝動をテコとして教育者による合理的系統的な習慣づけがはかられる。こうして習慣形成論に立つロックは、できるだけ早期からの教育・習慣づけを力説し、開発説を説いている。

このようなロックの幼児教育思想の根底には、子どもは白紙のようなものであり、好きな型に入れ、形の与えられる蜜蠟ろうろうにすぎないとする、「白紙説」がある。⁽⁴⁾このような幼児観に立つロックは敏感な幼年時代のわずかな経験の重大さを意識し、早期教育に着目したのである。かれはまた早期からの練習や習慣づけによる幼児の知的道徳的あるいは身体的な教育の可能性を認識し、遊戯・遊具を導入し、子どもの自己活動および活動衝動を促した。

しかしながら、ロックの思想には、ルソーにうかがえるようなむだな人為的な教育操作を拒み、子どもの自然性に着目するという、自然主義的あるいは消極的教育論の側面もある。それは子どもの自主的活動への信頼によってささえられており、幼児の自然性に根ざすものであった。この消極的教育論にしろ、先の習慣形成論にしろ、それらの背後にあったのは、ほかでもない子どもの自由な力、あるいは子どもの自発性に対する深い信

頼であったということが出来る。ロックは幼児の自由を幼児の本性ないしは発達の重要な契機であるとみなしたのである。

ところでロックの早期教育説と自然主義的との関連はどのようになされているのか。ロックは早期教育を説くばあい、合理的系統的なものを不可欠なものとして、早期教育の函どめをしている。逆にかれが自然主義を説くばあい、むだな人為的な教育操作ないし粉飾を排しようとしたのであって、合理的系統的な早期教育を忌避したわけではない。さらにかれは習慣形成を力説し、ルソーやペスタロッチーやフレーベルのように子どもを要求を解放していくというよりも、むしろ抑制という側面が前面に出されていたともいえる。しかしそれは決して子どもの自然性や自由を抑圧する性格のものではなかった。つまりロックは幼児の自由ならびに自発性を基調としながら、幼児の能動的な自発力と系統的合理的教育を促進するために、論理的な教育内容や方法を要請したのである。教育対象としての幼児、その教育内容ならびに教育方法の三者のすじ道のたった関連のなかで、幼児の教育をおしすすめていくことがロックの理想なのである。それはまさにルソーやペスタロッチーなどの先駆者として、近代的な幼児教育論の原型として位置づけられるべきものであった。

ところで幼児教育史からみればあいロックの幼児教育思想で

注目すべき点は以下のようなものである。つまり、ロックが教育を社会改革の有力な手段とみなしたこと。また個々の幼児の個性や興味や能力の差異にもとづく教育を準備しようとしたこと。さらには子どもを古き世代とは異なった発達段階にあるものとしてとらえていたこと。なかんづく大切なことは『市民政府論第二篇』において、子どもの教育の権利が両親にゆだねられることを根拠づけたこと(5)、などである。

ロックは以上のような注目すべき思想をうち出した。けれどもかれは発達可能態としての幼児の教育を考えるばあい、常に将来の社会人養成の見通しのなかで、適宜に教育を施していくとする。つまりいまだ幼児の社会適応論的発想に止まっているといわなければならない。幼児の固有な生活現実にもとづいて幼児の教育を考えるという、生き生きとした幼児観ではないロックの幼児教育思想の限界もここにあるといえるかもしれない。

二 ロックの幼児教育の内容

1. 保健体育

「健全な身体に宿る健全な精神」の理想を標ぼうするロックは、保健体育を幼児教育の基礎的な領域とした。当時の幼児教育の問題は、子どもたちが親の甘やかしや過保護によって白無

しにされているか、あるいは少なくともそこなわれているかである。こうした認識に立つロックは、四季を通じての薄着・無帽・足の冷水洗の励行・冷水浴・水浴・できるだけ戸外に出ること・寒中でも暖をとらぬようにすることなどを勧めている。以上のことは子どもたちを自然に適応させていくための身体鍛練なのである。そのため、早期から徐々に慣れさせ、習慣として定着し、習性となるようにはからうのである。この身体教育は、幼児期から徐々に自然に、しかも強力に施され、やがて小作人や小地主のように丈夫に鍛えあげることが目標とするのである。かくして保健体育の要点は、「医者が病院児や病弱児についてなすべきことではなく両親が医者助けをかりずに、これらの子どもの健康な、あるいは少なくとも、いな病気ではない体質を保護し、改善するために何をなすべきか」(6)ということなのである。ロックは子どもの自然的な体力を基調にしなから、健康維持、体力強化をはかったのである。たとえば、子どもの衣服は窮屈にせず「自然が最善と考えるように、自然が身体を作っていく余裕を与えるべき」なのである。なぜなら「自然はわれわれが監督するよりは、はるかによく正確に独力で仕事をするもの」(7)であるからである。

幼児の食生活においても、ロックはその習慣づけを重視する。総じて食事は古代人がそうであったように、あっさりして簡略

なものをとることが望ましい。当時の病気の二大誘因は、肉類の過大食とパンの過少食とである。また、アルコール分の少ない飲料や安全で健康によい果物を与えるようにし、不健康なものもは子どもの眼に触れさせない。さらに、常習的な空腹とかかわきとも、習慣によって起こりがちなものであるから、このような不正な習慣は細心な注意を払って消滅されなければならない。

さらに、ロックは健康維持に関して、睡眠・便通・医薬などにも言及している。睡眠は十分満足のいくまでとらせることをむねとするが、早寝早起きの習慣をつけさせることが肝要である。また健康維持には、規則正しい便通は不可欠であって、便通も習慣づけられうる。つまり便通が腸の蠕動運動によるものであり、不随意運動も絶え間ない働きかけて習慣化できるので、毎朝便器につかせて生理的な要求をひき起こさせるのである。

幼児期の習慣形成を重要な契機とするロックは、無計画な保健体育を排斥する。たとえば、下痢などは食餌療法や薬でいやすよりも、自然にゆだねる方が好ましい。予防のためといって、医薬の使用は極力ひかえる。病状の悪化のさいには、謹直で思慮ある医者によく聞くべきである。しかし、幼児期の傷つきやすい体質にはできるだけ手を加えず、また絶対に必要な場

合にだけしか、手を加えないのが、わたしの理論と経験の双方に照らしてみても適している」(8)のである。かくして、幼児期の健康管理は自然にゆだねることを前提にしながら、健康の増進のために幼児期からの漸進的な身体鍛練と訓練が不可欠なのである。

以上のようにして、ロックの保健体育論は精神活動をささえるための身体づくり論であり、体力と活力を保持する健康管理論である。たしかに身体の鍛練は強調され、遊戯もとり入れられた。(6)けれども、もっと積極的な子どもの自然的自発的な要求に根ざす身体運動や身体発達、あるいは体力増進については十分具体的に述べられていないことにはいささか不満が残るのである。

それにしても、ロックは医学に深い関心を寄せ、医学を学んだ時期もあり、実際かれは『医学について』などいくつかの論文を書いている。当時の自然科学を教養としておさめたロックが、人為的な教育操作を排して、幼児期の自然的な発達に基調をおきつつ、身体壮健な青少年の形成のために、漸進的ではあるが厳しい早期身体訓練を施そうとしたことは、注目すべきことである。このように幼児の自然性を生かしながら、後天的に調和のとれた訓練を施していくロックの保健体育論は、ともすれば諸科学の成果を安易に断片的に利用しがちな現在の幼児教

育に対する一つの警鐘であるように思われる。

2 徳育

徳育のねらいは、自己の過度の欲望を拒み、理性が最善として示すところに純粹に従い、人間としての尊敬と美質とにかなつた事柄にのみ同意するような精神の習慣形成である。なぜなら、あらゆる美德と美質は、奢侈と虚栄に通じる欲望の充足を自らしりぞける力にある。この力は習慣によって得られ、増進されるものであるからである。当時人々が徳育において誤っていたのは、しかるべき時期に子どもに自己抑制の習慣をつけさせることに意を払わなかったこと、ならびに精神が最も柔軟でたわめやすいときに、子どもを規則に従順で理性によく従うようにしておかなかったこと、の三点である。

このような誤った徳育は、子どもに過度な欲望を満足させる習慣をつけることである。それは、子どもに非行を教え、徳行からはずれさせ、暴力や残酷を容認させていくものにほかならない。たとえば、衣服は虚栄と競争の具であり、過食は奢侈に通ずるものである。ロックにあって、あらゆる美德と美質の原理は、欲望の充足を自らしりぞける力の育成である。この力は習慣によって得られ、増進されるものである。しかも早期から実行されれば、わけなく身近なものにできるのである。ここに

ロックが早期教育をとくに徳育において強調したことは注目される。

元來、子どもに望まれるものは、徳・知恵・しつけ・学習であるが、このうち徳は最も必要なものである。知恵は世間で仕事をうまく、また洞察をもって処理していく能力であり、未熟時代に知恵を得るためにできる一切のことは、かれらを真実と誠実に慣れさせることであり、理性に従い、またできるだけ自分自身の行為を反省することに慣れさせること⁽¹⁰⁾である。

たしかに人間が年齢や好みなどに適した願望をもつことはそれ自体誤りではない。問題は願望を理性の抑制に従わせないことにあるのである。だから子どもたちの無邪気ないたずらや遊びまたは子どもじみた行為は、問題ないかぎり、自由に抑制されずに放任されるべきである。そして強情・うぬぼれ・悪意による不作法でなければ、また、だれに対しても輕蔑を示さない礼儀をわきまえてさえいれば、子どもは成長するにつれて、自己発達を遂げていくであろう。このように子どもの自由は必要ではあるけれども、わがままは許されてはならない。なぜなら、それは自由以上のものを好むことであり、支配力と権力への愛着にはかならないからである。このわがままを防ぐ対策は、気まぐれの要求と自然の要求とを区別することである。気まぐれの要求は随時阻止されねばならない。たとえば、子どもは泣き

叫ぶことがよくあるが、過度な欲望を主張する場合は問題であって、黙認すべきではない。また自然な苦しみとしての苦痛のばあいさえも、苦しむ自分を悲しむことであるから、穏やかに扱わねばならないにしても、泣きやませねばならない。

欲望抑制のための性格づけにとって、臆病・残酷・懶惰は矯正されるべき性質である。臆病克服のためには、あらゆる種類の恐怖を遠ざけ、子どもが恐れ過ぎるものに徐々に慣れさせて、不屈の精神と勇氣を養わねばならない。生物を虐待するような残酷さは、ただちに矯正されねばならない。さらに、懶惰は、最悪の性質で、投げやりに怠けているときには、時間の浪費をやさしく説き聞かせてやらねばならない。懶惰に対しては、罰するよりも有効な逆療法がある。それは子どもの喜び遊びを毎日何時間もやらせて、遊びにあきさせるという方策である。

かくして幼児は正直・誠実・節制・自然な品行などに導かれねばならない。こうした特性の形成および習慣化にとって、遊具も役立つのである。子どもに持たせる遊具は、教師の監視のもとに、その都度一種類であるべきであって、乱雑、不注意、むだに使用させてはならない。そして不適当なものを望むときには拒絶せねばならない。注意すべきことは、遊具を使用するときには、自分の手で作るか、改造したりするような努力をし

なければならぬことである。「こうすれば、子どもは自分に欠けているものを、しかも自分自身の努力で探しもとめることに慣れる」また「こうすることによって、かれらは自分の欲望の抑制・応用・節制・勤勉・思索・工夫・じょうずな暮し方を学ぶ」⁽¹¹⁾であろう。

以上のように、ロックにあって徳育は美德と美質をめざしての欲望抑制の精神形成である。とはいえ、ロックが抑制しようとした欲望は過度なそれであり、不自然なそれであった。それらは奢侈や虚栄に通じるものであり、不合理な欲望であった。ロックは子どもの自然な欲望を承認するにしても、不自然な欲望は一切否定しようとした。そこには、自分の状況に応じて社会に順応することに忍耐できる人間の形成がめざされているのである。ロックの『教育に関する考察』の対象はあくまで若き「ジュントルマン」であったのである。しかし、ロックの徳育論には、一切のむだを省き、質素な生活に満足しつつ、経済的な生活態度を保持していく合理的な人間を形成しようとした厳格な禁欲主義の側面もあるのである。いなむしろ世俗的で質素で勤勉な人間の形成が、かれの徳育の本意であったように思われる。こうしてロックのばあい、徳育は幼児教育において前述の保健体育、これから述べようとする知育よりもより重要な分野であったのである。

3 知育

「形式陶冶説」に立つロックは、知育の要点を知識の習得よりも、知性の活動力の増進におき、知育を幼児教育の最後の構成部分として位置づけている。

子どもがもの言えるようになると、まず文字の読み方を教える。遊具を利用すれば、自然に楽しく読み方を学びるのである。たとえば一つの工夫として、アルファベットを書き込んだ三十二面体、二十六面体を作ることが考えられる。またはじめのうち、四文字あるいは二文字でやってみる。文字を覚え、綴字を学べば読むことが可能である。発音を覚えるために、たとえば六つの母音をさいころの六つの面にはりつけ、残りの十八子音をほかの三つのさいころの面にはりつける。

読み方ができるようになると、実物絵入りの「イソップ物語」などの平易で楽しく能力にかなった本を読ませる。ここに感官に訴える学習法が配慮されている。感官の認識作用における重要性は、『人間悟性論』のなかで十分に基礎づけられている。それは観念の起源を感官と反省ともとめていることに端的に示されている。ロックのこの感官の刺激によって、認識作用を促すという発想は直観教授に通ずるものである。

読み方の練習には通例聖書が用いられる。聖書のなかには(ヨ

セフとその兄弟たちの物語」のように、子どもに読ませるのに至当な部分があるのである。聖書の利点は子どもたちの心に種の精霊についてたくさんのことを教えなければならぬので、ひるがえって物体の研究の準備となることである。

さて楽しみながら、無理なく、文字や読み方を学んだ子どもは、次に書き方を学ぶ。まず、ペンの正しいもち方を教えられ、平素より大きめな文字を彫った板を手本として練習し、やがて白紙を用いるようにする。このように、字を習うことは、習字や図画の練習にもなるのである。さらに言語の学習は思想の伝達に不可欠であって⁽¹²⁾、母国語と外国語とを問わず、日常的な正しい会話によって習得されることが本筋であり、会話は自然の言語習得方法なのである。

知育の教科目としては、算術・地理学・年代学・歴史学・幾何学など多く列挙されているが、幼児期のものとしては、平明で単純なものからはじめることが原則であり、完全に記憶し、習得するまでは、新しい部分にとりかかせない。その限りでは、子どもに理解能力さえ備われれば、どのように幼少のときから知育をはじめてもよいのである。そのさい子どもたちの感官に訴えるものは有効である。またとくに、数学などのような教科は、その論理性が他の教科の学習に転移⁽¹³⁾できることを強調している。

以上のようにロックは幼児教育の知育において、易から難へ、低から高へという、合理的系統的な知育を子どもの自然に適したものとみなしていた。その限りにおいて早期教育は無理なく推進させることができる。早期教育はあくまで子どもの発達段階、能力、興味などに相応したものでなければならぬことはいうまでもない。かくして知育において大切なことは、一切のことを子どもに教えることではなくて、知識に対する愛と尊敬の念を子どもの心に起こし、子どもにその気があれば、自身自身を知り、向上する正しい軌道に乗せること⁽¹⁴⁾なのである。

4 みだしなみ、手仕事

ロックは、ジェントルマンのみだしなみとして、ダンス・音楽・乗馬・剣術などを要求している。ダンスは「生涯上品な身のこなしと、なにもものにもまして、男らしさと幼い子どもたちにもふさわしい自信を与える」⁽¹⁵⁾のである。次に音楽は演奏可能な腕前になるまでに相当な時間を費やすので、無理に強制される必要はないのであるが、心身の休息にも最適である。乗馬・剣術などはそれほど必要でない。しかも音楽・乗馬・剣術それに旅行は幼児には無理である。

ロックの提案する幼児教育の内容は、教養主義的な側面もたしかにうかがえるけれども、幼き「ジェントルマン」は職業に関

する知識ならびに手仕事を習得しなければならぬ。たとえば簿記などがそれであるが、ここにロックの職業陶冶の思想がうかがえる。職業訓練の有益さは次の二点にある。まず練習や訓練によって得られる諸技能、技術は身につけるに値し、さらには練習そのものは、健康に必要であり、役立つのである。ここには遊戯や遊具の説にうかがえたように、労働を主目的とするものではないにしても、子どもの自主活動の教育および労働教育への配慮がみられる。(16)

以上、きわめて実務的な色彩を帯びた職業教育論であった。生活への有用性という側面をさしひいても、それは単なる装飾的な虚栄のためのものではなく、あくまで幼児の将来の生活に役立ち、さらに真理に向かう視野を豊かにするという性格のものである。それにしてもロックの幼児教育論は、実務的、実際のな幼き「ジェントルマン」をめざし、現実生活において、ものごとを有能に処理できる人間が想定されている。

三 ロックの幼児教育の方法

ロックの幼児教育思想がコメニウスの思想などとならんで、近代の幼児教育思想に先鞭をつけたものとして評価されるのは、すぐれてロックがその方法上の原理を提示したからであると思われる。

ロックの幼児教育論は、子どもの素質や自発性を促進し発展させることを、その主要な目的としていた。それゆえ幼児教育の方法の眼目は、こうした幼児の素質や自発性をいかに促進されるかということに集約されるのである。ロックは子どもの発達を促すものとして遊戯をとりあげている。「遊戯気分は、子どもたちの年齢と気質に対し、自然によって、賢明にもふさわしくされているものであって、抑制したり、我慢させるよりは、子どもの元気を保ち、体力と健康を増進するためには、むしろすすめられるべきもの」であって、「おもな腕の振るいどころは、子どもたちがしなくてはならないことを全部スポーツ化し、遊戯とすること」(17)である。遊戯の効用は、子どもを自由に喜びをもって学ばせることができることにある。

ロックの方法論の特色は、子どもの実態に則した方法論にある。この心理学的なアプローチは現在でもみるべきものがある。教育は子どもの発達段階に照らして穏やかになされるべきことが望ましい。そこでロックは、厳重なむち打ちの罰をやめ、称賛・尊敬・名誉ならびに評判を導入している。さらに作法を教える場合でも、最小限度の規則、ならびに成人者による生きた実例、模範を重要な教育手段とみたのである。あるいは子どもを扱う方法として対話をあげている。かれによれば、子どもは想像以上に早くから理性的動物として取扱われることを好むものであ

り、言語と同じく早期から説明を理解できるものである。卒直に恥じ、不興を悟ることだけが、真の抑制である。これらによつてのみ手綱をしめ、子どもを正しい状態におけるのである。さらに、強情・臆病・残酷・なまけなど、子ども各人の気質と素質とによつて異なつた適切な教育法がとられねばならないのである。こうした幼児観察のうえに立つた教育方法は近代的な先駆として評価されるべきであらう。

ロックの心理学的な方法論は、知育に関しても適用される。かれは当時の学校での詰め込み教育を排し、興味論とレディネス論を展開する。知育の秘訣は、子どもに習わせたいものを好みにさせ、興味をもたせることにある。そうすれば、子どもは勤勉に心をこめて学習するようになるであらう。子どもの学習内容が重荷になつてはならないし、気が向いている場合以外にとりかからせてはならない。それゆえに「教師の大切な腕前は、その生徒の注意を引き、それを引きつけておくことであつて、そうできるかぎりはかならずその学習者の能力の及ぶだけ、すみやかに進歩させることができる」⁽¹⁸⁾のである。

また、子どもには好みの傾向と、都合のよい時期とがあるものである。都合のよいときは、子どもの心が調子づいて、気が向いているときである。そこで、ロックは幼児の好奇心を重視する。好奇心は知識欲であり、子どもを成長させる手段として、

助長されるべきものである。ロックは好奇心を子ども自身の活動衝動とみなす。そこでどのような質問にも、子どもの年齢と知識に応じて、できるだけわかるように真実を卒直に教えることが肝要である。こうして子どもが満足すれば、子どもの思想は拡大され、あわせて適切な回答によつて、想像よりもはるか先まで導かれるのである。かくして「子どもたちに質問をさせ、未知の新しいことについて知る機会を与えるために、そういうものを持ち出して、子どもたちの好奇心を刺激する」⁽¹⁹⁾のである。ロックはあくまで子どもの発達段階・能力・興味などに応じた幼児教育の方法を導入している。「良い方法ほど、学習者の進路を開き、学習の大きな手助けになり、学習者の進歩を非常に容易にし、またいかなる研究においても深く進ませるものはない」⁽²⁰⁾のである。

以上のようなロックの方法論の根底にあつたのは、子どもの自主活動への着目であることはいうまでもない。そしてこの方法論の根柢となつているものは、ほかでもない子どもの自由な力あるいは子どもの自発性・自然性に対する深い信頼であつたにちがいない。ロックは早期からの練習や習慣による幼児の知的道德的教育の可能性を認識し、遊戯・遊具を導入し、子どもの自己活動および活動衝動を促したのである。

四 ロックの教育環境と教育者

ロックによれば、学校教育は限界を有し、かえって、個人教育は一定の有効さをもつ。なぜなら、生徒たちは相互から学びとることがあまりないからである。当時の学校教育の教育的条件の拙悪さを考えれば、わからない意見でもない。ロックが一方的に学校教育を否定したのは、当時の学校教育が古典語教授を中心とする詰め込み教育に墮しており、子どもを正しく教育していないという理由による。かくして家庭教育が重視される。しかし当時の家庭教育は次のような点において誤っていた。つまり子弟が幼児のうちに、父親の権威を十分確立していないことである。そして子どもが成長してしまつてから後悔することになる。一度子どもが親を畏敬するようになれば、教育は容易に、正しくなされる。家庭では両親、とくに父親が子どもに対する教育（保育）義務を負うものである。なぜなら、子どもはまだ不完全な状態にあり、この状態の幼児を補助するのはその両親が最適であるからである。そこでとくに父親は、乳児期から子どもに厳しく接し、教育権威を確立する。子どもの成長につれて、厳格さを緩和していき、やがて親は子どもの忠告者となり、さらには相談相手となっていく。以上のような両親の教育権論が理論づけられているのは『市民政府論』第二篇第六章

においてである。

家庭において、子どもたちがものをいはいはじめるときから、慎重な真面目な賢明な人を子どもの周囲におくことが大切である。かれは、子どもの具体的な教育、とくに態度づくり、精神形成にあたる家庭教師である。良い家庭教師とは、礼儀の基準・良いしつけ・世間のことをよく知っている人のことである。かれの仕事は監督者として、子どもに良い習慣・徳・知恵の原理・人間についての見解を与えることである。よい家庭教師をもとめるための投資は、有意義な投資なのである。

ロックのこうした厳格な教育指導者論も、結局のところ、親に教育権威を与え、教育における親の子に対する指導性を明らかにし、子どもの自己活動をひきおこさせ、密度のある教育を推進しようとしたものにほかならない。つまり、幼少期には親は子に厳しく接し、親の権威を確立し、子どもが成長するにつれて、徐々に厳しさをゆるめ、ついには親は忠告、相談役となる。換言すれば、教育に一定の権威なり指導性が不可欠であるならば、ロックはそれを父親に託し、へつらいとなれあいを排した親の教育者としての覚醒を促したとみるべきであろう。

ロックは学校教育に批判的であった。というのも、当時の学校はスコラ的な詰め込み教育に終始していたのである。そこでロックは、学校教育よりも家庭教育を重視した。それゆえ、ロ

ックが教育を私事的に把握しようとする立場にあることは周知のとおりであった。そのさいかれは自己の家庭教師としての体験をふまえて発言したにもせよ、家庭教育を前面に出しすぎた結果、幼児の施設保育の重要さと有効さを見落とした。また当時の一般的な風潮でもあったが、個人教育が重視されすぎることとなり、子ども相互間の教育作用を消極的にとらえ、集団保育への展望を全く見失ってしまったのである。ただしかしかれが評判や名譽などを教育手段として重視したことは、かれが幼児教育を単に家庭教育での個人教育にとどめておこうとしたものでないことはいうまでもない。

むすび

現在ロックの幼児教育思想から学ぶべきものは、ロックが当時の幼児教育をどのように批判し、発展させようとしたか、という点にある。ロックは偉大な思想家の例にもれず、同時代の幼児教育の誤謬を批判することから論をはじめた。かれは当時の幼児教育が、両親のあまやかしや過保護や放任などによってゆがめられ、幼児はそのために台無しにされていると状況を分析した上で、両親による正しい幼児教育をとりもどそうとしたのであった。さらにかれは当時の学校教育が将来あまり役に立つことのないラテン語教授などの知育偏重教育によってかなり

ゆがめられていることの教育的損失を訴えたのである。こうしたロックの分析は、ほぼわれわれの現在の状況にもあてはまるのである。このようにロックは子どもの将来生活とか、幸福とかを前提として見通しながら、幼児の教育を展開していくのである。ロックの幼児観は「すべてを子どもから」という近代的な標語のなかにはつきりと立っている。

ただロックの教育思想の基調は、所与の市民社会の秩序に適合する人間の形成であった。ロックのめざす人間像は、結局は孜孜として勤勞する市民社会の担い手である。幼児教育は、この市民教育の基点であるという点において、重視されるのである。だから、ルソーなどのような人間を解放していくというような視点は弱いのである。また幼児を発達可能な存在として、その独自の教育の重要性を十分に理論づけているとは思われない。なぜならロックは、幼児をおとなとは異なった発達可能態としてみたけれども、幼児をおとなの縮少とみなしたために、具体的教育場面では、幼児固有の発達の契機を消失させてしまうことになった。この点は、ロックが乳児期、幼児期、就学前期等の区分を明確に意識していないことにもあらわれている。また幼児教育方法論はかなり詳しく述べられているにしても、幼児固有な発達のメカニズムについても触れられることはあまりなかった。ロックの思想はこのような問題点を残しながらも、

以下の二点はやはり注目されねばならない。つまりロックが幼児教育の重要性を強調するとともに、幼児の教育的な自己活動の道を開いたこと。また白紙同然の幼児にはあらゆる教育可能性がひめられており、指導次第では教育の効果はきわめて大きいことを理論づけたことなどである。

最後に、ロックが一委員として起草し、かれの案がほぼそのまま残されたといわれる『労働学校案』について少し触れてみたい。その案の中では貧民子弟(三十四歳)のために、労働学校の設置が提案されている。この設置の実現は、たしかに放置されていた貧民子弟に生活保障の場を提供し、いささかの初歩的教育を与え、しかも紡ぎ、編みものなどの作業を通して、子どもの将来の生活手段を獲得できるなど、多くの利点があった。しかしながらこの案は、貧民子弟に勤労の義務を強制していくことに通じている。この『労働学校案』は社会的身分(階層)に応じた教育²²⁾というロックの、あるいは当時のイギリスの教育観にうらうちされていたのである。しかもロックは教育を社会的適応の重要な手段と考えていたので、無産者としての貧民の子弟には労働に対する勤勉さと規則的な教会訪問を教えることで十分であると考えていた。かくしてロックが上層・下層の身分的教育論者といわれるゆえんである。

ロックの将来の「ジェントルマン」のための幼児教育論にし

ろ、また貧民子弟のためのそれにしろ、それらは過度な欲望を拒み、自己の立場に応じた欲望充足で満足する禁欲主義思想で貫徹されていたのである。それぞれの身分なり、立場なりで精一杯生活を営もうとする人間の形成が、かれの教育思想の根幹であった。その限りで、おかれた環境を改変する営みは問題でなかったし、体制改革の人間像は浮きばりにされなかった。そして人間の発達²³⁾の全面展開は主要な問題とされなかったのである。

ジョン・ロック (一六三二—一七〇四) の「生涯」

(広島大学)

イングランドのリントン近くで生まれる。一六五二年オックスフォードに入学、哲学・政治・宗教を学び(五二—五八年)、六〇年クライスト・チャーチの私教師となりギリシャ語・修辭学・哲学を教える。のち自然科学・医学を学ぶ(六四—六六年)。公使秘書としてドイツのブランデンブルクに滞在後、アシュリー卿(のちのシャフツベリー伯)に出会う(六六年)。以来卿の知遇をえて、侍医、顧問、家庭教師として、卿のロンドン邸宅で過ごす。伯が大法官となると共に、官途につくが、伯の失脚と共に退き、ロックは南フランスへ療養と研究に赴く(七五—七九年)。帰国して再び官吏になるが、伯の政治陰謀参画の難をうけ、八三年から名誉革命の終結する八九年までオランダに亡命。帰国後は安穩な職につく。一七〇〇年イングランドの

エセックスのマーシャム夫妻の邸宅に移り、一切の公職から身を引き、四年後安らかに逝く。

〔著作〕

主著「人間悟性論」(九〇年)では、生得観念の存在を否定し、人間精神の白紙状態を強調して、認識の根源を経験にもとめ、経験論を構築した。この哲学書の理論を具体化して、形式陶冶説を展開したのが「悟性の導き」(九七年)である。「市民政府論」(九〇年)では、人間存在の根本を自然状態にもとめ、契約にもとづく政府の組織化を説いて、民主主義的政治理念を基礎づけた。オランダ亡命中の友人、クラークへの書簡集である「教育に関する考察」(九三年)ではジェントルマン教育の集大成がなされた。ここでは経験や習慣が重視され、知識が感覚によってのみ獲得されると説く点において、ペーコンらの影響がみられる。またジェントルマンの教育にはモンテ・イニユなどからの影響がある。以上の著作のほかかれには「自然法論」(六三年)、「寛容に関する書簡」(六五年)、「学問論」(七七年ごろ)、「委員として起草した『労働学校案』」(九七年)など、興味深い著作が多い。

注

(1) 「科学と思想」一九七二・四《対談》思想・文化・教育」参考

- (2) ロック著服部知文訳「教育に関する考察」岩波文庫P・14
- (3) 服部訳 前掲書P・78
- (4) 「白紙説」はすでに古くはアリストテレス「精神について」第二章第四節、近くはコメニウス「大教授学」第五章第九節、第六章第五節などにみられる。

- (5) 「市民政府論」第二篇第六章参照 (6) 服部訳 前掲P・15
- (7) 同 P・24 (8) 同 P・44
- (9) 同 P・75・76 (10) 同 P・221
- (11) 同 P・207・208 (12) 「人間悟性論」第二卷参照
- (13) 「悟性の導き」第七節 (14) 服部訳 前掲書P・305
- (15) 同 P・310
- (16) ちなみに労働の意味は「市民政府論」第二篇第五章第二七節参照
- (17) 服部訳 前掲書P・75・76 (18) 同 P・261
- (19) 同 P・193 (20) 同 P・309
- (21) 「市民政府論」第二篇第六章参照
- (22) 服部訳 前掲書「献辞」P・12

交差保育法の実践（その五）



宮沢キヨ子・大塚朝子
佐藤佳代子・相楽幸子
指導 大戸美也子

三 交差保育の展開

二つの幼稚園の子どもたちが出会って、一つの融合集団を形成する過程、新しく生み出された集団を基盤に展開する活動を見ながら、交差保育の展開をとらえてみよう。

出会い

園舎前の広場に集まったとき、すっかり興奮しきっていた子どもたちも、幼稚園ごと、クラスごとに集まったり列を作っている間にようやく落ちつきをとりもどしてくる。子どもたちは、お互いの顔がよく見えるようにだ円形状に並び、担任の先生はクラスの子どものうしろに立つ。そして、全体をとらえて動く宮沢先生は、ザベリオと富田の子どもたちを引きあわせる仲介

の役割をとるので、二つの集団の境目に立つ。

「それでは——みんなでごあいさつしましょう。ザベリオ幼稚園のお友だちから富田幼稚園のお友だちへごあいさつしましょう」

「ごきげんよう」

「富田幼稚園のお友だちからザベリオ幼稚園のお友だちにごあいさつしましょう」

「こんにちわ」

「きく組のみなさん。そして朝子先生、ジーゼル先生、よくいらっしやいました。富田幼稚園のお友だちは毎日毎日、みなさんをお待ちしておりましたよ」

宮沢先生は、円の中に入り、きく組の子どもの顔をひとりひとり見ながら明るい大きな声で話しかける。

「どのようにして待っていたか聞いてみましょうか？」

今度は、きく組のうしろにまわり、富田の子どもたちと対面できる位置に移動して

「小さい組のスマイレさん。ちょっと手をあげてください」

スマイレ組の子どもたちは、全員背のびするように高く手をあげる。

「スマイレ組の恵美子先生、どんなふうに待っていましたか？」

スマイレ組の先生は、今朝から松ぼっくりに色をぬって、きく組のお友だちのプレゼントを作りながら待っていましたと、やや緊張しながら話す。

「おーい。大きい組のレンゲさん！」

「はーい、レンゲさんですよ」

先生も子どもたちもうれしそうに手をあげる。

「レンゲ組の相楽先生、いかがでしたか？」

相楽先生は、レンゲ組はここからここまでだと確認するように、レンゲ組の間を行ったりきたりしながら話す。

「レンゲさんはね、ザベリオのお友だちが迷わないで来れるように地図を一生懸命書きました。それからね、朝『先生、私ゆうべお星さまいっぱい出ているの見たから、きょう晴れるのわかってたよ』なんて楽しみにしていた人や、朝幼稚園にきてザベリオのお友だちに首飾りを作るお友だちもいました」

「次は、大きい組のタンポポさんです。おーい、タンポポさん！」

「はーい」
一斉に手をあげる。

「今、手をあげている人たちがタンポポさんです。タンポポさんは、お手紙をよんだり、二十九日は雨が降らないといいねって空をみたり、ぼくたちより背が大きいかな、どんな顔しているかなって話しながら待っていましたよ」

先生方は手紙や作品を通して、ザベリオの子どもと共通理解できていることに触れながら、自分のクラスの子どものようすを伝えていく。どの子どもも熱心にきいている。

「富田幼稚園には園長先生もいらっしやいます。園長先生！」

「ハイッ」と手をあげながら大きな声で返事をする。

「今日はよく来ましたね。お友だちと一しょに元気にあそんでください」

「あと、私がおながが太っていますけど、スマイレ組のキヨ子先生です」仲介役の宮沢先生が自己紹介する。

「今度はザベリオのお友だちに聞いてみましょうね。ザベリオきく組さん。朝子先生どんな風に待ってきましたか？」

大塚先生は、毎日今日を楽しみに待ってきたこと、バスにのってきたこと、そして、道に迷って困ったことなどを話す。最

後にジーゼル先生の番になると富田の子どもはざわめくが、「ドコノクニノガイジンデシヨウ？」と日本語で話しかけたので皆一安心する。

「今日はお天気がよくてよかったですね。富田幼稚園のお庭には小さい山がありますが、裏には大きな山があります。そのお山には、きれいな葉っぱやどんぐりや松ぼっくりが落ちていきますよ。どんぐりや松ぼっくり、落ち葉をひろって、ザベリオのお友だちと富田のお友だちが仲よく一日をすごしましょう」

全体のあいさつを終えると、ザベリオの子どもは荷物をおき、スモックに着替える。この間、富田の子どもたちは、スマイレ組はクラスに戻り、レンゲとタンポポはそのまま庭に列を作って、ザベリオのお友だちが戻ってくるのを待つ。ザベリオの子どもは荷物をおき、スモックを着て庭に戻ると、順にレンゲ・タンポポの子どもたちと手をつないでいく。物置き場には宮沢先生と大塚先生、庭でまつレンゲ・タンポポにはそれぞれの担任の先生がついて、子どもたちのお世話をする。みんながそろうまでに、お手洗いに行きたい人は、富田の子どもにも案内してもらってトイレに行く。

園庭を一緒に見る

「それでは、これから富田幼稚園のお庭を案内します」

レンゲグループはレンゲ組の相楽先生が先導し、きく組の大塚先生がつき、タンポポグループはタンポポ組の佐藤先生が先導役でジーゼル先生がついて、二手に分かれて園庭見学がはじまる。

富田幼稚園は、すでに紹介したように（四月号参照）園全体が丘陵の南側斜面を活用して建てられているため、坂の上の広場と園舎を除いて、園庭全体がなだらかなスロープをなしている。正門を入ると三本の道が坂の上の広場に向かって走っており、真正面と西側の道は丘陵の斜面そのままのなだらかな坂道であるが、東側の道は途中まで平らで園舎近くで急なガケをなしている。この急なガケを利用してスベリ台が二本作られているが、その内の一本は登り専用で作られている。中央の太い道と両サイドの道の間に背の低い松の木の植込みがあり、その植込みの中に小道が走り、ジャングルジムやタイコ橋、シーソー等が点在している。東側は全体に植込みも低く、ガケ状になっているので一年中日当りがよいが、西側は大きな木が繁っている。「緑のトンネル」と呼ばれるほどよい日陰ができる。

二手に分かれた子どもたちは、年少のスマイレ組の子どもたちに送られて、レンゲグループは東まわり、タンポポグループは西まわりに、手紙などで話題になった箇所を中心に見てまわる。

レンゲグループは、最初広場をぐるっと見渡し、園舎をずっ

と見てからガケのスベリ台のところへ行く。

子ども(ザ)「あつノすべり台だノ」

「これからすべり台をすべりますよ。ちょっと急なんだけど大丈夫かしら?」

「気をつけてすべらなくっちゃあね」

「ウワッ!」「キャッ!」「コワイ!」

ザベリオの子どもたちは、はじめて見る急なすべり台をみて奇声をあげる。

「ザベリオのお友だちははじめてだから、富田の友だちは、しっかり手をにぎってやってね。順番に二人ずつすべりましよう。先生からすべりますよ」

相楽先生は真先にすべって、下から「どうぞ」と合図を送る。

短いけれど、スピードのつくすべり台をみて緊張もほぐれ、うれしそうに歓声をあげてすべる。次々勢いよくすべりおりてくるのを見ているだけでも肩に力が入り、うれしそうである。

「みんなすべりましたか?こんどは上に登っていくんだけど、ふつうの階段じゃないのよ、のぼれるかしら?」

「はいっ、ウワッ!」コンクリートのすべり台に子どもの歩中に穴が無造作にあげられているだけだが、この見なれぬ階段を皆四つばいになって登っていく。

「へんなの。おもしろかったな!」

大急ぎで再びすべり台をすべってもう一度登ってみる子どももいる。一しよにすべり台をすべって気持ちごとけあったのか、手をつなぎあっている者同士の会話がはずんでくる。

子ども(ザ)「ぼくの名まえ知っているかい」

子ども(富)「ううん、知らない」

子ども(ザ)「お・の・ぎ・き・あ・つ・しっていうんだ」

子ども(富)「ボクはとみたで一ばんつよいんだ!」

広場から真正面の道を正門に向けてくだり、途中ジャングルジムやたいこ橋に登ったりして西側の「緑のトンネル」に入る。

「ここは、くりの木のトンネルです。くぐっていきますよ」

「ちがうよ。どんぐりだよ」いささかあがり気味の先生に、

富田の子どもは落ちついた調子で注意する。

「あつ、そうでしたね。先生よりもみんなの方がよく知っているわね。ハイックぐりますよ」

「ドングリの木のトンネルですって。まほうの木もあるかしら」

きく組の大塚先生が、手紙の中に出てきたまほうの木のことを思い出して歩きながら子どもたちに話しかける。

子ども(ザ)「あつ、まほうの木だ。だってこんな形になっているもん!」ここに足はさんだよ。きつと」

「きつとそうね。そうだわ。相楽先生、これですか? まほ

うの木って」という大塚先生の質問に、相楽先生はにっこりうなずいて「そうですよ」という。そして、皆で木にさわってみる。

一方、タンポポグループは広場の東側スミにおいてある青い自動車（廃車）から見ていく。

「これがね、手紙にも書いてあったと思うけど青い自動車です。富田のお友だちはこれにのってね、運転の練習したり、ドライブごっこをして遊ぶのよ」ザベリオには自動車がないので、自動車にさわったり、中を熱心にのぞきこんでいる。

「さあ、自動車みたらね。今度は坂をおりてまほうの木の所へ行きますよ」西側の木のおい繁ったならかな坂道をゆっくりくだっていく。ザベリオの子どもたちは大きな木を見あげながら「どれがまほうの木？」という。一しよに手をつないでいる富田の子どもは「あそこ、もつと下の方」と指さして教える。「どうして、これがまほうの木かっていうとね。ホラ、ここから枝が分かれているでしょ？ 富田のお友だちがね、まだドングリの実が青いうちにまちきれなくて木に登ってとろうとするの。そんなとき、ちょうどここに足をささんじゃってね、なかなかとれなくなるの。何人もそんなふうになったわね」

「ぼく、なったの」

「○○ちゃんもなったんだよ」

富田の子どもは体験や友だちの体験を話す。「そんなになったらどうしてとるの？」ザベリオの子どもは不思議そうにきく。「そうね、なかなかとれなくてね」といいながら、先生は木にのぼって実演してみせる

「足を上からおしたり、下からおしてみたりしてやっとなれるの。足がいたくなるときもあるの」

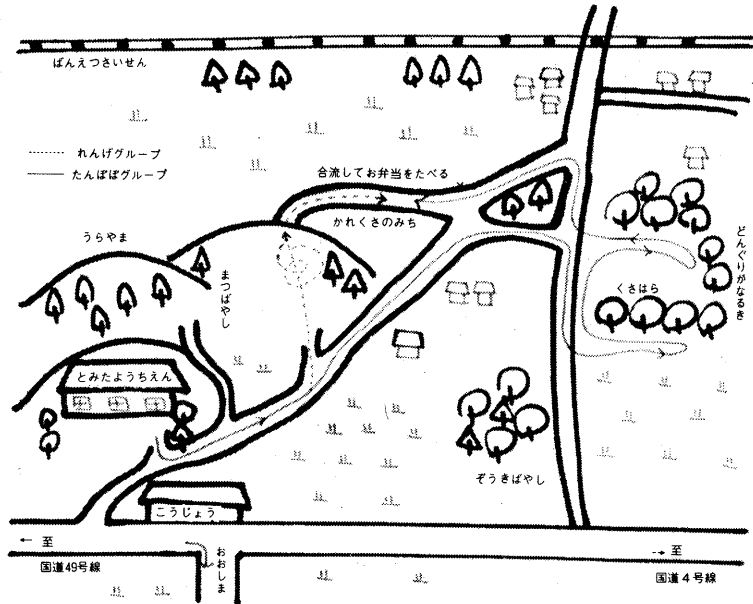
「ふうーん」

先生は木を見あげながら「もう、どんぐりの実なっていないよな」という。まほうの木を見終わると、真正面の道を広場に向けてあがり、両側の道と連がる丸木の階段をおりてすべり台の下に出る、さっきのレンゲ組とは逆に下から最初に登る。

「ぼくじょうずにのぼれるよ、ザベリオの人ひっぱってやっかな？」富田の子どもたちがじょうずにのぼるのを見て、ザベリオの子どもも一生懸命のぼる。上にあがると二人一組に手をつないでやはり歓声をあげながらすべってくる。本当に短いすべり台なのに心から楽しそうにすべってくる。

年少児がへやに入り、年長児とザベリオの子どもが園庭見学に出かけたあと、広場には宮沢先生が残り、次の活動木の実拾い——に必要なバケツやビニール袋の用意をしている。

十五分間ほどの園庭見学を終え、二グループとも広場に戻ってくる。裏山へ木の実を拾いに行く準備にとりかかる。予定



では、木の実を拾ってから全員そろって園庭でお弁当をたべ、一しよにゲーム等をする事になったのだが、予定より時間がずっと遅れてしまったので、木の実を拾った後、山でお弁当を食べ、帰る前に時間のゆるす限り全体で活動をする事に変更する。年少児はおみやげの松ぼっくりに色をぬる活動がつづいているので、そのままへやの中で活動をつづけ、年長児とザベリオの子どもたちだけで、さきほどのグループ毎に分かれて山に木の実を拾いに出かける。

林に行つて木の実をひろう

「それでは、ドングリ拾いに出発しますよ!」

「スマレさん、キヨ子先生いってきます」スマレ組の子ども、先生に見送られて手をふりながら裏山へ向かう。

〈レンゲグループ〉

山へ行く途中にもドングリが落ちてきている。

「ひろってもいいですよ」

「あっ、あった! あった!」富田の子どもは見つけるのも早いし、拾うのも早い。ザベリオの子どもも対象的である。

「大きな石がころがっているからころばないようにね」

山道にさしかかるところで、松林を指さしながら「あそこに林がみえるでしょ。あの林に行きます」浅黒い松林が目の前に広がり、草ぼうぼうの小道に足をふみ入れただけで充分冒險的な気分になってくる。その小道には花もさいている。

「黄色い花だ。むらさきの花もさいている」

「きれいだなあ」

松林にさしかかる子と、まつぼっくりが松の枝に点々とついているのが、青い空にはえて美しい。

「みんな、上をみてごらん。たくさん松ぼっくりがなっているのがみえるでしょ？」

「あつ、いっぱいあるう——」

「これから林に入ります。袋がいっぱいになるくらい松ぼっくりをひろってくださいね」

うす暗い、しめった林の中に入っていくと、先頭の子どもが突然「鳥の羽根だ」といって羽根をひろう。見るとあたり一面大きな羽根や小さな羽根がとび散っている。

「たかの羽根かな？ それともはとの羽根かな？」

「どうしてこんなところに羽根がおちているのかなあ」子どもたちは口々にこんなことをいいながら、羽根もひろって袋に入れていく。列の最後にいた富田の子どもが、羽根の中から小鳥

の首を見つけ出し「鳥がけんかしたんだ」というとその首をすて羽根を数枚ひろって皆の方へ走っていく。

「さあ、もう少し行くとたくさんおちているところがありますよ」ザベリオの子どもは、ものめずらしげにキョロキョロしている内に、たおれた松の木にぎっしり松ぼっくりがついているのをみつけて「ワァッ」と歓声をあげて夢中になってとる。富田の子どもは「向うにもっとあるよ」と落ちついたようすで通りすぎていく。

子ども（ザ）「先生ノ とげのある赤い実があるんだけどちょっときてノ」

大塚「あら、本当のバラの実だわ、お友だちにもおしえてあげたら」

子ども（ザ）「はっぱのうらにホラノ 赤い玉子がいっぱいついている」

大塚「何の玉子かしら。お友だちに見せてあげましょう。知っているお友だちがいるかもしれないから」

ザベリオの子どもも先生も木の実をひろったりいろいろな発見で忙しい。

林は十分もあるけばまた田んぼに出てしまうが、出口近くに小さな広場があってそこに松ぼっくりがたくさんおちている。富田の子どもたちはいつも来なれているので松ぼっくりをどん

どんひろつてはバケツに入れていく。時々、めずらしそうに松ぼっくりを見ているザベリオの子どもめずらしそうに見たりする。ザベリオの子どもは、両手にいっぱいひろう子、スモックのスソをまくつてその中に入れる子、二、三個手にもつて満足している子、ただだまつて見ている子等、さまざまである。ザベリオの女兒が富田の相楽先生に「先生、これ！」といって赤い小さな実を三個、手のひらにのせてみせる。

「まあきれい。そんな実もあつたの？」

「うん、あそこにあつたの」とうれしそうに話す。全員ひとつになつて木々とたわむれているようである。

〈タンポポグループ〉

幼稚園を出てなだらかな坂道をずんずんのぼっていく。

「この道をのぼっていくと、どんぐりのある林につくのよ。」



タンポポさん、ほら、いつか大塚先生からいただいたビスケットをたべた野原へ行くの。わかるわね」

「あー、あそこか。わかつたよ」

行く先は先頭の富田の子どもにまかせて、佐藤先生は列の後ろに位置しながら、ザベリオの子どもに話しかける。

「ザベリオのお友だちくたびれない？ ずっと歩いているものね、足は元気？」子どもたちは大丈夫というようにコックリうなづく。

「大塚先生、どこにいるの？」

大塚先生は別のグループについているため、先生のとが気がかりだったのだろう。

「大塚先生は、もうひとつのきく組さんの方にいるのよ」ふりかえると、丁度もう一つのグループが林に入るところが見えたので「ほら、あそこにいるでしょ？ もう少しして、木の实をひろつたらまた大塚先生に会えますよ」というと、子どもたちは安心して元気に歩きます。やがて草原にでる。

「これがどんぐりのなる木ですよ。いっぱいおちているかしら？ ひろつたらバケツに入れてね」富田の子どもは「あつたよ」「この前より少ない」等と話しながら次々に見つけてはひろっていくが、ザベリオの子どもは探したりひろうのに忙しくて声も出さない。一緒についてきたジーゼル先生も一生懸命さが

している。

「コレキレイデスネ。トテモツヤガアッテ」大きめのどんぐりを指でこすって大切そうにもつ。バケツに半分ぐらいたまったところで「この近くにもう少しどんぐりの落ちてるところがありますから、そこへ行きましょう」ザベリオの子どもたちにとっては、これでも充分すぎるほどのどんぐりであるが、富田の子どもはバケツ一ぱいひろうつもりなので、場所を変えてひろうことにする。20〜30メートルもいくと別の林につき、子どもたちは黙々とひろいつづけバケツにほとんど一ぱいになる。「たくさんとれたわね。もうそろそろお弁当にしましょうか。たくさん歩いたから、おなががすいたでしょうね。もう少し行くとふかふかの草がたくさんあるところがあるの。そこでお弁当にしましょう。きっと大塚先生や他のおともだちもきていま



すよ」

そのころ、レンゲグループも木の実ひろいをおえ、枯草のフワフワするあぜ道をお弁当をたべる場所に向かって歩いていて、やがて同じあぜ道をもう一つのグループがやってくるのが見えかくれる。「オーイ」「オーイ」と呼びかう声が、遠くにひびく脱穀機のブーンといううなり声とともに秋空にこだまする。

(つづく)



本 本

川崎千東

比較的新しいものから二つの絵本を
えらびました。

十一ぴきのねこ

馬場のぼる著　こぐま社

幼稚園の年長の男児たちがこの本を
愛読して卒業期に劇化しました。その
劇の何といきいきしていた事でしょう。
十一ぴきのねこがみんな主演顔で、し
っぱのフィリングを楽しみながら、
せりふと動作に熱しているのを見てい

て、保育者のほほも紅潮してきました。

この本を家庭にいる四歳児にも見せ
ました。二度三度とせがまれて読むう
ちに、これもまたしぐさをはじめまし
た。魚形のしょう油さしを見つけてき
て、最初のページの小さい魚の発見か
ら始まり、発泡スチロールの箱を怪物
の大魚に見立てて、テールの上から
とびかかり、「歯もたちません」とせ
りふ入りで、片足に包帯して仰向けに
寝ころがったり、チラッチラツ、怪物
の魚を片眼をつぶってふり返つてみた
り、電気を消して真暗な海。

「ああねこたち、たべちゃった」た
ぬきのおなかで最高潮になり、セーター
の下にボールを入れてたぬきのおなか
を表現し、テールの上で大の字にな
り、よだれをこぼして大満悦。ひとり
で十一ぴきを熱演じてあきることをし
らない。著者はあとがきで「タメにな

りそうもない絵本」と書いていられる
が、タメになる絵本とはどんな絵本か
と反問したくなります。四歳児の心を
とりこにした魅力に文句なしに頭がさ
がります。

もちもちの木　岩崎書店

斉藤隆介作　滝平二郎絵

この絵本は、雪国で生活した者の心
を特にひきつけます。三、四歳児では
このファンタジックなものにひかれる
度合がまだうすいように思えますが、
年長児はしつとりとした画面にみとれ
ています。ひかれる度合いがうすいと
書きましたが手離す事はなく、好きな
ページが断片的にあります。三番目の
白地に紺で画かれたモチモチの木を
「朝のモチモチの木」と勝手に解釈し
てよく見えています。肝心の、このとち
の木に灯がついた画面はそれほどもの
を感じないよううで、むしろ、「しもが

足にかみついた。足からは血がでた”
という豆太が懸命に走る場面をよく見ています。本の中のことでは、**ジサマ**”**グしょんべんか**”**ヤイ木イ**”**モチモチの木イ**”**実イオトセエ**”が大すきで、祖母をジサマにしてしがみつきたり、その反対に自分がジサマになったりしている状態は、臆病な豆太の性格に共感するのでしょうか。

まだこの本を丸ごと理解できないようですが、印象の強い断片がそのうち彼の心の中でつなぎ合わされて、この本の持つ本当の味わいをよみがえらせる日が、きっとあるでしょう。私はかつて夜ふけの雪みちの街燈下で、美しい雪姫の幻影を見たことがあるので、あかりに輝くモチの木が頭の中にくっきりと浮かびあがってきます。
おとなの本から子どもに関連のあるものとして二、三あげました。

わが遍歴の山河 東山魁夷 新潮社

この著者の**馬車**よゆつくり走れ”
に、より感銘したのですが、長くなるのでこの方を選びました。

私はよく山の子ども達と遊んだものです。涙をたらしている子ども達も、写生をしている前へ立ちはだかつて、その頃の私は幸福そうな顔をしていました。純粹に画家であるよりも、もつ

と他のもの、いわば人間であったからです。それはたしかに道草でした”

しかし、この道草があったればこそ、今日の円熟があるのだと私は思います。

続 雪椿 茅誠司 雷鳥社

科学的とはなにか、小学生の作文を引用して、蟬のよく来る木、寄りつかない木の発見をする素朴な道程など、

この随筆のすぐれた感覚と、深く広い学識と、気どらない筆致とによって標題の意味がよく理解されます。

心の風物詩 島崎敏樹 岩波新書

まぼろしの観光旅行、ある高校のデラックスな関西から九州までの修学旅行で、この若者たちの生の歴史にきざみこまれたものは、奈良の古寺でも阿蘇の火口でもなく、裏町のバーの夜景であり、ホテルのベッドの感触であった。紙の上だけの保育計画と似たような話です。

私の読んだ本 松田道雄 岩波新書

同じ世代を生きた私には、著者の足

もとにも及ばないながら、なつかしい書名が散見されて一気に読みました。

それにしてもこの著者の、幼年期に本らしい本を読まず、友だちとの遊びに夢中だった事実をかみしめて考えてみる必要があるように思います。

(東京家政大学附属幼稚園)

洋 書 紹 介

*Children's Games in Street
and Playground*

by Iona and Peter Opie

Printed 1969

Oxford, at the Clarendon Press



江 波 諄 子

この書物の中では、イギリス本土やウェルズ、スコットランド地方の子どもの遊び―屋外で行なわれ、特に遊具を使わない遊び―が大変詳しく、ていねいに調べられて、分類されています。遊びと学習との間に論争の多い昨今、日本の子どもの遊びも考えながら、昔ながらの子どもの遊びをふり返ってながめてみるのも心落ち着くものかと思えます。

著者はイギリス王国の各都市に住む、六歳から十二歳までの一万人以上の子どもを対象に、彼らの遊びを観察したり、聞いたり、また他の国々の研究者からも補ってもらい、これまでの文献も参考に、三百七十一ページという膨大な本にまとめました。

細かい遊びの紹介はこの欄ではできませんので、研究の結果、彼らが気がついたことについて、いくつか箇条書きにあげてみましょう。

① 本当のゲームというものは、精神的に自由なもので、何の心配もいらぬ。たとえ、ある種の形があるにしても、結局は遊ぶ子ども自身が即興で行なうものである。それに比べて、形のきちんとしたゲームでは、責任感や喜びや恥ずかしさが伴う。

② 遊び (Play) には何の拘束もないが、ゲームには規則がある。遊びはファンタジーの要素が入ってくるが、ゲームは

内容がより大切である。子どものゲームは規則も最小限で、しかも規則は弾力的である。少くらしいの欠員は大丈夫で、お互いに技能を競い合うということは少ない。ゲームを始める前の儀礼的なことは大変重要で、何回もくり返され、特に終りがあるというわけではない。競争するというより、もっと儀式的なものようである。

③ 子どもはゲームをくり返しすることによって、それに慣れ、その中から朋友感を得る。ちようど、恥ずかしがりやの人が形式ばったことから自分をあらわしてゆくように、子どもはゲームの方法に慣れるとともに、自分のいごこちもよくなり、他のことも仲よしになっていく。ゲームの中では、子どもは別に自分のことを説明しなくても、ゲームに夢中になることができ、仲間の間で人気者であろうとなかろうとよいプレイヤーになれる。ふだん恐れている子どもとも、ゲームの中ではよきパートナーになれる。ふだんの生活では経験できなかったり、やっても誰も頼りにしてもらえない子どもでも、ゲームではことに命令したり、困ったり、盗塁したり、つかまえた者にキスしたりすることが本人の決定にまかされる。

④ 子どもがゲームをして遊ぶ時、彼はあるコントロールの下で場面をつくっている。そしてそれがどんな結果になるか彼にはわからない。ゲームには、いつも冒険的な興奮と不安定が

あり、年齢が小さくても全体はわかり、また自分の役割も理解できる。そのことによって子どもは自分の世界をひろげ、自分も何かしているのだと感じ、ふだんの経験では味わえない感激を味わう。

⑤ 現代の子どものは昔よりもずっと、おとなっぽくなり、以前の子どもよりも、二、三年早く同じ遊びをしている。

⑥ 子ども遊びはその他の社会の変化と比べるとそれほど変化していない。ことにゲーム中のある種の練習など、ゲームそのものよりも変わっていない。

⑦ ゲームはしだいにその形や規則を変え、また人気も変わっていく。ひとつのゲームでも、規則や形の変化が加わったりする。スポーツはそれがもっと精巧化されたもので、より高度な技術が必要になってくる。そして一ゲーム終えるのにもずっと時間がかかる。

一見なくなりそうなゲームも、そのゲーム全部はしなくなっても、実際の内容は残っている。ゲームを始める前のちよつとした時間や、おまじないのようなことはなくなっても、ゲームそのものの内容は、今人気のあるゲームの中に入りこんだりしている。だから、なくなりそうな遊びも決して完全に消えさせているのではない。

⑧ 子どもはいつも街路とか公共の場所のような、不適当な

場所遊ぶ。遊びには、そういった意味で何かに対する反抗的な面があるのだろうか？

⑨ 子どもの遊びは、時々残酷な面がある。子どもがたくさん集まる遊びは、わりあい、攻撃的なものが多いと社会学者はいつている。ということは、いろいろな部族が集まるとお互いにけんかをするという人間の習性にも似ている。

⑩ 子どもはごちゃごちゃした場所や空地などが、隠れたり、探検できるので好きである。

⑪ 子どもは遊びを発明するというより、模倣していく。昔あった遊びが今ないというのは、人為的になくなったのではなく、子どもがまちがえておぼえたり、聞いて変わってしまったのである。

以上本文からの抜萃ですが、このあと、著者はゲームを十二種類に分け、それぞれに属する子どもの遊びをこまかく紹介しています。文化的な背景がないと十分理解できませんが、その中でわが国の子どもの遊びとの共通の面をみつけるのも楽しいものです。

News Week

22th, May

1972

雑誌ニューズウィークの五月二十二日号（一九七二年）の教育欄は、「学習するのに幼すぎることはない」といった題で、米全国各地での幼児教育運動の盛んな動きをとりあげています。その中から困いこみの記事をご紹介します。これは「親は何をしてやれるか」と題して、数名の心理学者や教育者に一言ずつ尋ねたものです。以下はその中からの抜萃です。

母親がすることは何でしょうか？ 急速におこった幼児教育の波の中で、多くの母親たちは不安にただうろたえるばかりです。ジョニーは、二歳のお誕生日までにアルファベットを知らなくてはならないのでしょうか。スージーは小さな頭の中に、たくさんの語彙を詰めこまなくてはならないのでしょうか。専門家は口をそろえて、早期学習は大切だ、その多くは、両親にゆだねられていて、出発が悪いと子どもの人生をだいなしにして

しまふ、といひます。

しかし、普通の良心的な親であれば、そんなに恐れることはない、彼らはいつています。

イリノイ大学の教育学部の教授であるハント(J. Mc Vicker Hunt)は次のようにいひます。幼児教育の最も効果的な手がかりは、子どもの興味と感激です。もし子どもがある物へ手をのばそうとしていたら、その子どもはその時非常に大切な経験をしているのです。立派な母親ならば、簡単にその物を子どものそばへ投げてはやらないでしょう。彼女は子どもの近くへ投げるのであつて、手元まで持つていってはやらないのです。そうすれば、子どもはその物を得ようとして非常にいろいろな経験をすることになるからです。われわれは常に子どもがイニシアティブをとるようにし、彼らを自分たちの力の中に入れてしまわないようにしなければならぬ。他の子どもが自分の子どもより進んでいると親が感じた時、自分の子どもに無理をしい、そして問題が起こるのである。

ノースキャロライナ大学の国立精神衛生研究所の幼児研究グループの前ディレクターであるシャエファア教授(Earl S. Schaefer)は次のようにいひます。もし母親が自分のことを、家庭の主婦というより、母親教師と思えば、自分の役割についてもっとよくわかるのではないか。教育者として、親は言葉を

強調して使ひながら、子どもと活動や経験をわかちあふよう努力をしなければならぬ。たとえば、食料品屋さんへ行つてそこにあるものについて話し、料理をしながらも、それについてしゃべる。本を見る時も話し、食事の時もししゃべる。このように教育というものは、生活の中にあるのです。

シラキュウス大学の子どもセンターのディレクターであるラリー(Ronald Lally)は、生まれてから十八カ月の間に子どもとの社会的交流の九〇パーセントは、着物をきせたり、食物を与えている時など、子どもの世話をしている間に起こるといひている。たとえば、親は子どものおむつをできるだけすばやくとりかえる必要はないので、この時を子どもとの交流のチャンスにつかうといひ。子どもの世話をしながら笑つたり、話しかけたりたくさんできるものです。そしてこういう時こそが、子どもの生活の中で最も大切な部分なのです。

ハーバード大学の教育学部の教授であるホワイト(Burton White)は、優秀な子どもの母親は、子どもがその時々々に何に興味をいだいているか知り、そのことについて十分子どもと話ししてすすすといひている。子どもの興味はあまり持続するものではないけれど、だいたい平均して二十秒くらいは、子どもが先導して続くものです。母親は子どもの興味をひくような家庭をつくり、子どもが自由に声を出したり、好奇心を持てるよう

にしてやるのです。子どもを拘束することのないように。ということは、プレイペン（幼児用遊びわく）やクリップ（幼児用わくつきベッド）を使うなどということではなく、使ってもよいが、あまりに長い間は入れておかないようにということです。母親は少なくとも一日に一時間以上は十分に子どもに注意をむけてあげたらよいでしょう。

シカゴ大学の教育学部の教授であるブルーム (Benjamin S. Bloom) は、もし一言でいえるというなら、親は進んで集まって自分たちがそれぞれ子どもにとつた方法について話し合い、意見を交換すべきでしょう。幼児教育は家族を中心としたもので、研究所の中で行なわれるものではありません。多分、ひとりの親は他の親よりも、少しだけ多く知っているかもしれない。けれど親は専門家のように、たくさん知っている必要はないのです。ただ少し知っているということ、お兄さん程度でよいのです。親は意見を交換したり、本を読んだり、フィルムを見たり、簡単な研究をして、少しでも不安をとりのぞくのです。そうすれば、子どもから反対に教えられるということに気づくでしょう。

いろいろな専門家と話して、誰もがいうことは、どんな親でも幼児期の教育や思いやりや勇気にぶつかるといふことです。子どもを育てる中で最少限度の要求は、人間にとつて決してお金のかかることではないと、ハーバード大のホワイトはいふ。親は、非常に頭がよい必要もないし、よい仕事を持っている必要もない。お金持でなくても、必ずしも幸福な結婚をしてなくてもよい。そして、子どもの教育のためにまる一日中を使うこともないのだという。

(十文字学園女子短期大学)

幼児の教育 第七十一巻 第九号

九月号 定価一〇〇円

昭和四十七年八月二十五日印刷
昭和四十七年九月 一 日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

111 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所
所フレーベル館にお願いたします

楽しいお絵かきのひとのひと!



☆キンダー2人用画架…1セット8,000円

このキンダー2人用画架は、子どもの視線と紙間の位置を一致させることができ、画板も描きやすい角度にできています。パレットや筆立て、水入れも使いやすい位置にあり、すべてが子どもたちによりよいように設計されています。両面から同時に2人が使用できるので経済的で格納する時は折りたためるので場所をとりません。

- 規格・画架(木製・画板の大きさ=60×60cm) 1脚
- パレット(プラスチック製) ……2枚
 - 筆立用コップ(プラスチック製) …2個
 - 水入れ用コップ(プラスチック製) …2個
 - 画用紙どめクリップ(金属製) ……4個

☆キンダーカラースタンド…2,600円

直径40cmの金属性回転式スタンドに絵の具と筆がセットできます。色の選択が容易でテーブルの中央に置けば何人もで使うことができます。200cc入りフタ付容器10個、筆立て10個付き。

☆キンダー版画セット …… 3,200円

幼児用に特に開発した版画セットです。インキは水溶性なので簡単に洗えます。

- インキ(200g入り)赤・黄・青・緑・茶・白・黒の7色、ねり板7枚、ローラー7本、インキペラ7本、パレン4コ、タンポ4コ、てぶくろ4枚、ステンハンギ4枚。



お日さまの下で遊ぼう!

キンダー トッカ

砂場用品

★ダイナミックシリーズ

セット定価 16,300円

ダンプトラック	4,800円
ブルドーザー	3,200円
シャベルドーザー	4,800円
セメントミキサー	3,500円
*ヘルメット4個サービス!	1個 400円

★サンシリーズ セット定価 6,500円

ジープ	1,000円
ブルドーザー	1,200円
シャベルドーザー	1,400円
ダンプトラック	2,900円
*ヘルメット2個サービス!	1個 400円

★キンダー砂場セット

セット定価 6,000円

砂型(4種類)	黄・緑	20コ
シャベル	赤・青	40コ
フルイ	ピンク	10コ
バケツ	赤	4コ
整理用カゴ	黄	2コ

★砂型トレイン セット定価 1,100円

★ま す 4個1セット 250円
赤・黄・青・緑

★一輪車・鉄製 3,200円